

ことわざ集

萩原義雄

文学資料における「ことわざ」目次

1. 近代文学作品と「ことわざ」
2. 古典文学作品と「ことわざ」

A 奈良時代 B 平安時代 C 鎌倉時代 D 室町時代 E 江戸時代

1、近代文学作品と「ことわざ」

悪事千里を走る

・日本は万里波濤(ハトウ)の彼方(かなた)にあるとはいえ、悪事千里を走るという諺もある。夢で土佐の西浜や中浜の人たちに会うようなとき、たとえ夢のなかでもその人たちに対して会わせる顔がない。「井伏鱒二『ジョン万次郎漂流記』一六二⑧」

糞に懲りて膾を吹く

・十人は十人の因果を持つ。糞に懲りて膾を吹くは、株(しゆ)を守つて兎(うさぎ)を待つと、等しく一様の大律に支配せらる。「夏目漱石『虞美人草』二六八⑧」

一寸の蟲にも五分の魂

・同時に長吉が芝居道へ這入らうといふ希望もまたわるいとは思はれない。一寸の蟲にも五分の魂で、人にはそれぞれの気質がある。「永井荷風『すみだ川』一八二⑮」

豕を抱いて臭きを知らず

・お勢は今甚だしく迷っている、豕(いのこ)を抱(いだ)いて臭きを知らずとかで、境界(きやうがい)の臭みに居ても、おそらくは、その臭味がわかるまい。「二葉亭四迷『浮雲』一九〇⑪」

江戸の敵に長崎で巡り逢う

・この頃は江戸の敵に長崎で巡り逢つた様な心持がする。学問は立身出世の道具である。親の機嫌に逆つて師走正月の拍子をはずす為の修業ではあるまい。「夏目漱石『虞美人草』二〇一⑬」

温泉水滑洗凝脂

・ただ這入る度に考え出すのは、白楽天の温泉水滑洗凝脂と云う句だけである。温泉と云う名を聞けば必ずこの句にあらわれたような愉快な気持になる。「夏目漱石『草枕』七」

聞いて極楽見て地獄

・伯父は母親のやうに正面から烈しく反対を稱(と)なへはしなかつたけれど、聞いて極楽見て地獄の譬を引き、劇道(げきだう)の成功の困難、舞臺の生活の苦痛、藝人社會の交際の煩瑣(はんさ)な事などを長々「なが／＼」と語つた後、母親の心をも推察してやるやうにと、伯父の忠告を待たずともよく解つてゐる事を述べつけたのであつた。「永井荷風『すみだ川』一八三⑫」

不許葦酒入山門

・しばらく不許葦酒入山門と云う石を撫(な)でて立っていたが、急にうれしくなつて、

登り出したのである。「夏目漱石『草枕』十一」

獣にさえ屠所のあゆみ

・聲けいを打つて入室相見しようけんの時、足音を聞いただけで、公案の工夫が出来たか、出来ないか、手に取る様にわかるもじやと云った和尚(おしょう)がある。気の引けるときは歩き方にも現われる。獣(けい)にもにさえ屠所(とろしょ)としよのあゆみと云う諺がある。参禅の衲子(のうし)に限った現象とは認められぬ。「夏目漱石『虞美人草』209⑥」

故郷忘じ難し

・それにお尋ねの風聞も大抵抜けた様子だから故郷忘じ難しの譬で、二人一處(いつしょ)に江戸へ往き、どんな暮しでもしやうじやないか。「三遊亭圓朝『鹽原多助一代記』一三九下27」

坐して食えば山も空し

・高い男と飯に名乗らせた男は本名を内海文三(うちみふんぞう)と言ッて静岡県の者で、父親は旧幕府に仕えて俸禄を食(は)だ者で有ツたが、幕府倒れて王政古(いにしえ)に復(かえり)時津風(ときづかぜ)に靡(なび)かぬ民(たみ)草(くさ)もない明治の御世に成ッてからは、旧里静岡に蟄居(ちつきよ)して暫(しば)らくは偷(とう)食(じき)の民となり、為(な)すこともなく昨日(きのう)と送り今日と暮す内、坐して食えば山も空(そら)しの諺(ことわざ)に漏(も)れず、次第々々に貯蓄(たくわえ)の手薄になるところから足掻(あが)き出したが、さて木から落ちた猿猴(さる)の身(み)というものは意気地の無い者で、腕は真陰流に固ッていても鋤(すく)は使えず、口は左様(さよう)然らばと重く成ッていて見れば急にはヘイの音(お)も出されず、といッて天秤(てんびん)を肩(かた)当るも家名の汚れ外聞が見ツとも宜くないといッので、足を挿木(すりこぎ)に駄(か)け廻ッて辛(から)くして静岡藩の史生に住込み、ヤレ嬉しやと言ッたところが腰弁当の境界(きようがい)、なかなか浮み上る程には参らぬが、デモ感心には多(おおく)も無い資本を吝(しみ)まずして一子文三に学問を仕込む。「二葉亭四迷『浮雲』一二⑦」

釈迦に説法土佐珠に彩色

・其時善孝進(すゑみい)出で、御如在(ごじよざい)もなき此方様には釋迦(しやか)に説法(とさだま)土佐珠(とさだま)に彩色(いろぞら)、ちと憚(はぢかり)多き小才覺と御譴責(ごせんさく)おしかりのあらむか知らねど、鳶(とんび)細川(ほそがわ)ほそかはの石室様(いしむろさま)は什麼(いかん)なものでござります。《尾崎紅葉『伽羅枕』一五一⑤》

株を守つて兎を待つ

・十人は十人の因果を持つ。糞(ふ)に懲(こ)りて膾(なま)を吹くは、株(しゆ)を守つて兎(うさぎ)を待つと、等しく一樣の大律に支配せらる。「夏目漱石『虞美人草』二六八⑧」

生は相憐れみ、死は相捐つ

・生(い)は相憐(あい)れみ、死(あ)は相捐(あ)つという諺(ことわざ)がある。其諺通りなら定基は早速に僧を請じ経を誦(よ)させ、野辺の送りを営むべきであった。「幸田露伴『連環記』」

蜀犬日に吠え、呉牛月に喘ぐ

・「そうかな。蜀(しよ)犬(けん)日に吠(ほ)え、呉(こ)牛(ぎゆう)月に喘(あえ)ぐと云うから、わしのような田舎者(いなかもの)は、かえつて困るかも知れんてのう」(夏目漱石『草枕』※小学館『日本国語大辞典』第二版に、しよつけん日に吠(ほ)ゆ(中国の蜀(四川省)地方は山地で、霧が深く日のさすことがまれであるため、太陽を見ると犬が怪しんで吠えたとすることわざ。柳宗元の「答韋中立論師道書」に見えるのによる)無知なためあたりまえのことをもあやしむこと、また、識見の狭い人が、他の人の非凡な言行に対して疑いを抱くことにいう。*惺窩文集(一六二七頃)二・訳語「蜀犬之吠(日)也、非(日)之不明、以(レ)不知為(レ)異而已」*草枕(一九〇六)〈夏目漱石〉一一「蜀犬日に吠え、呉牛月に喘ぐと云

ふから、わしの様な田舎者は却って困るかも知れんてのう」

好きな物は身にもなれば薬にもなる

・「そりや楽しいだらうな。私も見張りをしたり餌はこびの手伝いをしたりするよ。だがもう一日二日ここにしよう。こんなに沢山梅の木のあるところはどこにもない。あの虫をうんとたべてから帰ろう。好きな物は身にもなれば薬にもなる」〔中 勘助『鳥の物語』鶯の話 一三七⑦〕

涼風は夕餉の半

・人の眠る時は鬼の醒めたる時なり。十字を截りて寐よ。この鐵壁をば吼る獅子も越えずといふ。神を祈らば、あのマリウチアの腐女が、そちにも我にも難儀を掛けたるを訴へて、毒に中り、悪瘡を發するやうに呪へかし。おとなしく寐よ。小窓をば開けておくべし。涼風は夕餉(ゆふげ)の半(なかば)といふ諺あり。蝙蝠をなおそれそ。かなたこなたへ飛びめぐれど、入るものにはあらず。神の子と共に熟寐せよ。斯く云ひ畢りて、をぢは戸を鎖ぢて去りぬ。〔森鷗外訳』即興詩人』上・蹇巧五六③〕

人の弓は彎れぬ

・なほ、思ふに思はれぬが戀の通例(ならひ)とて、我も終つひに家暮(やぼ)に根引かれて、かく世話女房に簞(やつ)れてはつるかと思へば、女子(をんな)と生れたる身が一生の無念、と心あり氣に唧(かこ)ちぬる粹(こ)かしに跪(もろ)くも仆(たふ)れて、人の弓は彎(ひか)れぬ世諺(よのことわざ)、我も見過(みす)く口惜(く)くやしき事(こと)と、なほ心あり氣に答(こた)へければ、もどかしや、義理といふものなき世間(よ)ならばと、有情(なさけ)の流盼(しりめづ)かひに正助力を得て、大丈夫(ちやうぶ)物(もの)と無遠慮(むえんりょ)に擦寄(すりよ)り——ひたと兩體(りやうたい)からだを密着(みせき)おしつけて、此(こ)れで義理も絲瓜(へちま)もなき世間(よ)と障子(しょうじ)を立切りぬ。〔尾崎紅葉』伽羅枕』五十六155七〕

武士は相見互

・「なに、昔なら武士は相見互(あいみたがい)と云う所で。ハハハ私などもいつ何時(なんどき)御世話(ごせわ)にならんとも限らん。然し、久し振で東京(とうきょう)へ御移(ごうつり)ではさぞ御不自由(ごふじゆう)で御困(ご)りだろう」〔夏目漱石』虞美人草』362十五〕

満は損を招く

・うつくしきものを、彌(や)が上に、うつくしくせんと焦(こ)せるとき、うつくしきものは却(か)つて其度を減(へ)ずるが例(れい)である。人事(じんじ)に就(つ)ても満は損を招くとの諺(ことわざ)は是(こゝ)が爲(ため)めである。〔夏目漱石』草枕』四〇二⑧〕

目印の柳の下で平常魚は釣れぬ代り、思ひよらぬ蛤の吸物から真珠を拾ひ出す

・亀屋(かめや)の爺心(やぢこころ)配(は)し、泣(な)くな泣(な)きやるな浮世(うきよ)は車(くるま)、大八(だいぱち)の片輪田(かたわだ)の中に踏(ふ)込んだ様にちつとして、くよくよして居るよりは、外(ほか)をあるいて見たら又(また)どんな女(おんな)に廻(まわ)り合(あ)ふかもしれぬ、目印(めいしん)の柳(やなぎ)の下(した)で平常魚(へいじやうぎよ)は釣(つ)れぬ代(しろ)り、思(おも)ひよらぬ蛤(かき)の吸物(しりしめづ)から真珠(しんじゆ)を拾(ひろ)ひ出すと云ふ諺(ことわざ)があるは、腹(はら)を広く持(も)て、コレ若(わか)いの、恋(こひ)は他(ほか)にもある者を、と詞(こと)おかしく、元頭(もとだう)の脳漿(のうじやう)から天保度(てんぽど)の浮氣論(うきろん)主意(し)書(しよ)といふ所(ところ)を引抽(ひ)き、黴(かび)の生(は)えた洒落(しやれ)を熨斗(ぬいす)に添(そ)て度々(たびたび)進呈(しんせい)すれど少しも取り容(ゆる)れず、〔幸田露伴』風流佛』六九⑬〕

旧の木阿弥

・それも厭(いと)なりこれも厭(いと)なりで、二時間(にじかん)ばかりと云うものは黙坐(もくざ)して腕(うで)を拱(こ)ぐんで、沈吟(しんぎん)し

て嘆息して、千思万考、審念熟慮して屈托してみたが、詮(せん)ずる所は旧(もと)の木阿弥(もくあみ)。「ハテどうしたものだろう」「二葉亭四迷『浮雲』一四一⑧」

八幡の藪不知

・何が何だか分りやしない。まるで八幡(やわた)の藪不知(やぶしらず)へ這入った様なものだ」「本当に——要領を得ないにも困り切る」「夏目漱石『虞美人草』三〇一④」《解釈》千葉県市川市の葛飾八幡宮の南方の藪は、ここに入ると出られなくなると言い伝えられていた。

良薬も口に苦き

・されどもわれの心は、不老長生の薬液を得るにあれば、神に祈り佛に念じ、只すら母の病の輕かれと願ふの外なく、醫師も頼むに足らず、良薬も口に苦きのみにて、些の効能もあらねば、この上は天の力、神の力、佛の力を頼むの外なしと、一意専念、勇猛精進、肚裏に他の物を容れず、眼に他の物を見ねば、路に豺狼ありとも、蛇蝎ありとも、怯まず、怖れず、行く／＼その村に着きぬ。「大橋乙羽『不老泉』文語」

【参考文献一覧】

- 井伏鱒二 『ジョン万次郎漂流記』(新潮文庫)昭和十二年
大橋乙羽 『不老泉』(雑誌「太陽」一八九五(明治二八)年六月号所載)
尾崎紅葉 『伽羅枕』(岩波文庫)
幸田露伴 『風流佛』(日本近代文学大系6)
幸田露伴 『連環記』(露伴全集、第六卷・岩波書店)
三遊亭圓朝 『鹽原多助一代記』(明治文学全集10)
中 勘助 『鳥の物語』(岩波文庫)
永井荷風 『すみだ川』(日本近代文学大系29) 明治四十二年十二月
夏目漱石 『草枕』(鶉籠)明治四十年一月一日発行・名著復刻全集近代文学館
夏目漱石 『虞美人草』(新潮文庫)
二葉亭四迷 『浮雲』(新潮文庫)
森 鷗外 『即興詩人』(岩波文庫)

2、古典文学作品と「ことわざ」

A 奈良時代の諺

堅石も醉人を避く

かく歌ひて幸行(さいこう)でましし時、御杖をもちて大坂の道中(みちなか)の大石を打ちたまへば、その石走り避(さ)りき。故諺(ことわざ)に「堅石(かたしは)も醉人(さびびと)を避(さ)く」といふなり。『古事記』146⑦《意訳》堅い岩でも酔っぱらいをば避ける。

地得ぬ玉作

ここに天皇悔い恨みたまひて、玉作りし人等(ども)を惡(にく)まして、その地(ところ)を皆奪ひたまひき。故、諺(ことわざ)に「地(ち)得(え)ぬ玉作(たまづくり)」と曰(い)ふなり。『古事記』110②《

《参考資料》

『古事記』(岩波文庫)

B 平安時代の諺

「何況朝開＝榮華一、暮隨＝無常之風一、宵翫＝朗月一曙隱＝別離之雲一」。《類句》『發心集』に「況や又春の朝に華を翫びし人も、夕には北芒の風に散り、秋の夕に月を伴ひし輩も、曉には東岱の雲に隠れぬ」、『塵荆集』卷第十一「人間六十年電光朝霞ノ如シ。春ノ朝ニ花ヲ翫人、夕ニ北芒ノ風ニ散り、秋宵月ヲ詠メシ輩ヲ、曉東岱ノ雲ニ隱ヌ」(386)とある。

あなにくの病鵲のやもめがらすや、夜中に人をおどろかす

あなにくの病鵲(ビヤウジヤク)のやもめがらすや、夜中(よなか)に人をおどろかすと云(いふ)は、そのたび「の」事也。《仏教説話集》『實物集』卷第五214⑩《典拠》『遊仙窟』中「誰知可憎病鵲、夜半驚人」《意訳》愛し合う男女の別れを促すように夜半に鳴く鳥。

魚の木に昇る

悪七兵衛景清が申けるは、「中坂東の者共は馬の上にてぞ口は聞候へ共、舩軍などはいつかなれ候べき。魚の木に昇たるにてこそ候わんずれ。一々に取て海に漬候なんず」。《延慶本》『平家物語』卷六本三二ウ⑥

会稽のはぢを雪む

かゝる賢人(けんじん)なりとて、當國・他国より大勢來りてつきければ、終に吳王(ごわう)夫妻(ふうさい)差ぶきをほろぼし、会稽のはぢを雪むとはかやうの事をこそ申せ。『《平治物語》』大系二七九⑬《連関資料》元龜二年本『運歩色葉集』に「雪(きよみ)＝会稽(けい)クワイケイ(恥(はぢ)ヲ」一九六③

口の虎は身をやぶる

又行基菩薩菅原寺の東南院にしてをはりとりたまひけるとき、もろ／＼のてしとををしへいましめていはく、口(クチ)の虎(トラ)ハ身をやぶる、舌(シタノ)の劔(ケム)ハいのちをたつ、くちをしてはなのことくにすれハ後(ノチ)あやまつことなし。とらハしにてかはをのこす、人ハしにて名をとくむと。さてよみたまひけるうた かりそめ乃やさしかるよをいまさらにものおもひそほとけとをなれ 又云、のりの月ひさしくもかなとおもへともさよふけぬらしひかりかくしつかくよみて身心あんおんにしてそをはりたまひにける。『《古来風林抄》』上17才⑤～17ウ⑧

《連関資料》『十訓抄』

賢臣二君に仕ず、貞女兩夫にまみえず

纔(わづか)息の通ひけるも、事切はてにければ、臆(おそ)かしこにて煙となし、是をも圓覺寺へ送て、同所に納てンげり。賢臣二君に仕ず、貞女兩夫にまみえずと云文有。哀に優しかりけりと、上一人より下萬人に至まで、袖をしほらぬはなかりけり。『《保元物語》』大系一六一⑤《典拠》『史記』田單傳「忠臣不事二君。貞女不更二夫」《連関資料》元龜二年本『運歩色葉集』に「賢臣(けんしん)シ不(ス)事(ツカ)二君(ニくん)シクシニ(ニ二二〇③)、「貞女(ていぢよ)不(ス)見(ミ)兩夫(りやうふ)ニ(ニ二四九⑥)とそれぞれ別にして収載する。

心之憂危ナル若(コト)蹈(フミ)虎尾涉于春冰

言祖藥之大已才之弱(ヨハキ)故心懷(イタ)ケリ危懼也。虎尾畏ル啗(クハ)レシ。春氷畏ル陷(ヲチ)ラン。懼ル之甚也。『《群書治要》』卷第二495・134⑨《典拠》『尚書』

舌の劔はいのちをたつ

又行基菩薩菅原寺の東南院にしてをはりとりたまひけるととき、もろ／＼のてしとををしへいましめていはく、口(クチ)の虎(トラ)ハ身をやぶる、舌(シタノ)の劔(ケム)ハいのちをたつ、くちをしてはなのことくにすれハ後(ノチ)あやまつことなし。とらハしにてかはをのこす、人ハしにて名をとくむと。さてよみたまひけるうた かりそめ乃やさしかるよをいまさらにものおもひそほと

けとをなれ 又云、のりの月ひさしくもかなとおもへともさよふけぬらしひかりかくしつ
かくよみて身心あんおんにしてそをはりたまひにける。『古来風躰抄』上17才⑤〜17ウ⑧

梅檀は、二葉よりかほばし

良竹は、おひいづればすぐなり、梅檀は、二葉よりかほばしとは、かやうの事にしら
れたり。『曾我物語』

◆【補記】勉強が大好きで、学校が嫌い、というのが、少年熊楠のはっきりした性向で
あった。梅檀双葉より香ばしく、この性向は、生涯ついてまわった。ちなみに、梅檀
は棟ともよばれる、広辞苑にある。棟の花は、南方の大好きな花であった。「鶴見和子
著『南方熊楠―地球志向の比較学―』講談社学術文庫118頁①⑦〜119頁②」

梅檀は二葉よりにほひ、梅花はつぼめるに香あり

導師、やゝひさしくへて、なみだおしのこひて、「ほのかに傳へうけたまはる。此諷誦の施主は、御
とし一そぢあまりとかや。いつしか、内外の才智にまし／＼て、和漢の風儀に達し給へる事、い
かに三世の佛もあはれとみそなはかし、亡魂もかなしと思すらん」とのたまひしに、げにもとお
ぼえて、なみだをながし侍りき。《中略》梅檀せんだんは二葉はよりにほひ、梅花はつぼめるに香
（かをり）ありとは、かやうの事にてしられ侍り。『撰集抄』卷九第九、實房ノ御事」

天に口なし、人をもつて言はせよ

一院還御の後（のち）、御前にうとからぬ近習たち数多（あまた）侍はれるに、仰（おほ）せられけ
るは、「さても不思議（ふしぎ）の事（こと）を申（まう）し出（だ）したるものかな。おぼしめしやらぬも
のを」と宣（のたま）ひければ、院中のきり者に西光法師といふ者有（あ）り。『天に口なし、人を
もつて言はせよ』と申（まう）す事（こと）候。平家（いけ）もつてのほかに過分に候へば、天の御告げ
にてもや候（まう）らん」とぞ申（まう）しける。人々、「この事（こと）よしなし。『壁に耳有（あ）り』おそ
ろし、おそろし」とぞ申（まう）し合（あ）はれる。《百二十句『平家物語』卷第一、1054頁》

とらはしにてかはをのこす、人はしにて名をとぐむ

又行基菩薩菅原寺の東南院にしてをはりとりたまひけるとき、もろ／＼のてしとみにをしへい
ましていはく、口（クチ）の虎（トラ）ハ身をやふる、舌（シタノ）の劔（ケム）ハいのちをたつ、くちを
してはなのことくにすれハ後（ノチ）あやまつことなし。とらハしにてかはをのこす、人ハしにて名を
とぐむと。さてよみたまひけるうた かりそめ乃（な）やさしかるよをいまさらにものおもひそほ
とけとをなれ 又云、のりの月ひさしくもかなとおもへともさよふけぬらしひかりかくしつ
かくよみて身心あんおんにしてそをはりたまひにける。『古来風躰抄』上17才⑤〜17ウ

⑧《連関資料『十訓抄』》

人木石にあらず。しかじ傾城の色に相ざらん

人木石（ぼくせき）にあらず。しかじ傾城（けいせい）の（色）（いろ）に相（あ）はざらんと、文集（ぶんじ）
うの文（もん）也。ことほりとぞおぼえける。『平治物語』下・大系二八七⑧《典拠》『白氏文集』
新樂府「人非木石皆有情。不如不遇傾城色」。《意訳》人は木でも石でもなく皆情（みななさけ）を持（も）っている。とすれば、美
人に惑（まど）わされるのは無理（むり）はない。やつぱり、城（きやう）を傾（かた）めるような美人（びじん）にめぐりあわないのにこしたことはない。

人間の寶には子に過たる物こそなかりけれ

入道先（まづ）涙（なみだ）をながして、「あはれ、人間（にんげん）の寶（たから）には子（こ）に過（すぎ）たる物
（もの）こそなかりけれ。子（こ）ならざらん者（もの）、たれかは身（み）にかへて助（たす）くべき。生々（しんしん）世々（せせ）にも此恩（このおん）

忘れまじきぞよ。」とて手を合(あはせ)悦(よろこび)給ふ。『保元物語』大系一四四⑥

少者共の瘦たる顔をみて物へ出ざる

今朝を限にて有けると少者共の瘦たる顔をみて物へ出ざると云ならはせる諺は誠なりけるぞや。『保元物語』大系一五八⑫

白骨は父の恩、赤肉は母の恩

父母(ふも)孝養(けうやう)して仏に成べしと申は、懺悔の中の第一の懺悔にてぞ侍るべき。父の恩の高き事、須弥(しゆみ)のごとし。母の徳のふかき事は、滄海(さうかい)にいたり。白骨(はくこつ)は父の恩なり、赤肉(しやくにく)は母のをんなり。人むまれて後(のち)、母の乳(ち)をのむ事、百八十石(ひゃくしやく)いはんや、一劫(いつくわつ)の間にのむ所は、四大海のごとしといへり。亀(かめ)の子をみる眼、鶴(つる)の子をおもふ声、恩愛(おんあい)をふかし。いかにいはんや、人倫(じんりん)にをきてをや。『仏教説話集』『寶物集』卷第六267⑫『類』『骨肉之親』『觀智院本』『世俗』『六十二』『連関資料』『童子教』に「父恩者高山 須弥山返下 母德者深海 滄溟海還淺 白骨者父姪 赤肉者母姪 赤白二滞和 成五體身分」とある。⇒室町時代の諺「白き骨は父の恩、肉叢は母の恩」を参照。

花一時、人一時

酒、菓子鉢の物取出して被勸(こゝろ)て後、「さて御房、今日は閑に居て、世間の物語して遊給へ。つれ／＼なるに」と宣ければ、文学、兵衛佐の膝近居(つ)て申けるは、「花一時、人一時と申譬あり。平家は世末になりたりとみゆ。太政入道嫡子、小松内大臣こそ、謀も賢く、心も強にて、父の後をも可継一人にておわせしか。『延慶本』『平家物語』P2079〔第三卷、第二末・39才81頁〕上486頁」

花をあひする人は胡蝶になり、鳥をあはれむものは畜生になる

されば、花をあひする人は胡蝶(こてふ)になり、鳥をあはれむものは畜生(ちくしやう)になる。となむ申(まう)したるなり。『仏教説話集』『寶物集』卷第七309②『類』『發心集』卷一の八。『柿本講式』に「就(すなは)ち中或所にいはく、花を愛すれば蝶となて春の野にとび、水をあひすれば魚となて秋の淵にあそぶといへり」とある。

煩惱は家の犬、うてどさる事なく、菩提は山の鹿、つなげどもとまりがたし

煩惱(ぼんノウ)は家(いへ)の犬(いぬ)、うてどさる事なく、菩提(ぼだい)は山の鹿(かぜき)、つなげどもとまりがたし。『寶物集』卷第四149⑭『典』『往生要集』大文五の四「野鹿は繋ぎ難く、家狗は自ら馴る。いかにいはんや、自ら心を恣にせば、その悪幾許ぞ」『意訳』「菩提心」を「野の鹿」、「煩惱心」を「家の狗」にたとえ、「菩提心」というものは自らの手元にとどめ置くことが難しく、逆に「煩惱心」の方は馴れ馴れしく身近にへばりつくものである。⇒下記、室町時代篇を参照されたし。

水は滔々として日々度る、人は冉冉として行き暮らしぬ

されば文選と申文には、水(みづ)は滔々(タウタウ)として日(ひ)に度(わた)る 人(ひと)は冉冉(ぜんぜん)として行(ゆ)き暮(くら)しぬ 何(いづ)れの世(よ)としてか弗(ふ)らん絶(た)えて新(あらた)ならん 世(よ)何(いづ)れの人(ひと)としてか能(よ)く故(ふる)からん とは申たるぞかし。『仏教説話集』『寶物集』卷第二190⑧『典』『文選』卷第十六・哀傷・陸士衡「歎逝賦一首」に「水滔々而日度。世閱人而爲世、人冉冉而行暮。人何世而弗新、世何人之能故」。『意訳』水は、滔々と日々絶え間なく流れている。このように人も次第次第に老いてゆく。しかし、いかなる世にあつても人は一新されずして、また、この世に生きる人であつても昔のままでは

ありえないのである。

藪に目、壁に耳あり

文学近く差寄て、「藪に目、壁に耳ありと云こと、いと忍て申合べき事ありて、態と人にもしられず、夜にまぎれて参て候也」と云《延慶本『平家物語』P2086〔第三卷、第二末・42ウ88頁〕上490頁》

【参考文献一覧】

藤原俊成自筆・建久八年(1197)寫・國寶『古来風躰抄』(冷泉家時雨亭叢書第一卷)

軍記物語『保元物語』(日本古典文学大系)

軍記物語『平治物語』(日本古典文学大系)

軍記物語百二十句本『平家物語』(国会図書館蔵)

軍記物語延慶本『平家物語』(大東急記念文庫蔵、影印)

軍記物語『曾我物語』(日本古典文学大系)

仏教説話集『寶物集』(新日本古典文学大系)

仏教説話集『撰集抄』(岩波文庫)

漢籍『群書治要』(古典研究會叢書、影印)

室町時代／江戸時代初期の諺

悪事千里を走る

・石童丸はきこしめし 悪事千里を走るとは 爰の譬を申かよ 父母の空しく御なりありたるが 某よりも先に聞こゑてに 御弔をなさるゝよ あら嬉しやとおぼし 御門の内ゑぞ御入ある。「説経集」かるかや』三〇九③」

・然れども好事門を出でず 悪事千里を走る 雖は袋を通すとて 都わらんべ漏れ聞ひて

二条の屋形の小栗と深泥池の大蛇と夜な夜な通ひ 契りをこむるとの風聞なり。「説経集」をぐり』一六七②」《典拠》「好事不出門、悪事行千里」『伝灯録』北夢瑣言』《意訳》悪いうわさはすぐに知れわたる。

仇を慈悲に報ずる

・さても 某それがしは。儂はかなき事を申てあり。仇(あたを仇(あたにて報ほうずれば。燃(もゆる火(ひに薪(たぎを添(そふる如(ごとく也。仇(あたを慈悲(じひにて報ずれば。これは仏(ほとけ)の位(くらゐなり。いかに太夫(たゆゑ。大国(こくが欲ほしきか。小国(せうこくが欲ほしきか。望(のぞみ次第(しだい)に取(と)らすべし。太夫(たゆゑいかに」との御錠(ごぢやう也。「説経集」さんせう太夫』三七八②)《連関資料》「仇は恩にて報ずる」『毛吹草』。《典拠》「怨二報ズルニ徳ヲ以テス」『老子』。

蟻が茶臼をめぐる

・こと／＼しく足を空にまどふが、たゞ一夜あけぬれば、ひきかへ心もゆる／＼と、又とも晦日の来るべき心もなくて、野辺の小松に千代万世を祝ひそめ、いつ死ぬべきものとはなしに、万のこゝとを忌みおそれ、朝の露に名利をむさぼり、夕の陽に子孫を愛し、蟻(ありが磨(ちやうす)をめぐるがごとく、おなじことをくるり／＼と、五百八十年七曲がりと祝ひて、世を秋風の心は露ちりほどもなき人心を、一休おかしく思しめし、「誠におろかなるかな、權の〆〆待つ間をも盛り久しき花とながめ、蜉蝣(かげろふ)の青天に羽をふるひて楽しむ間もなき世の中に、糞(くそ)に箔はくぬる正月言葉(ことば)や、たゞ時の間の煙ともなりなむと、打見るより思はるゝ。いで物見せん

人々よ」と、墓はらへゆきて、しやれ頭かうぐを拾ひ来り、竹の先に貫きて、比は正月元日の早天に、洛中の家々の門の口へ如鼓／＼と彼しやれ頭かうぐをさし出し、「御用心／＼」とて歩（あり）き給ふ。『仮名草子集』一休ばなし』三五―一四』《意訳》終わりのないことをいう。

鮑の貝の片思ひ

・釣瓶（つるびん）ぐるぐるの手縄（てなは）繰（く）り返し、か程（ほど）思（おも）ひの切（き）せつなるに、知（し）らせてもがなあはれげに、なに中々（なか／＼）の草の蔭（かげ）、日蔭（ひかげ）に消（き）えも果（は）つべきに、戀（こひ）には死（し）なれぬ物ものなれば、思（おも）ひ明石（あかし）の浦風（うらかせ）に、獨（ひとり）焦（こ）がる／＼聞（きこ）ねやの内（うち）へ、涙（なみだ）のことに月浮（う）かぶ、いつか思（おも）ひの空（そら）晴（は）れて、君（きみ）と契（せ）りし聞（きこ）ねやの内（うち）へ、月の光（ひかり）を頼（たの）まのまんと、鮑（あわび）の貝（かい）の片思（かたおも）ひ、由（よし）無（な）く思（おも）ふばかりなり。『仮名草子』恨の介』下71③』《意訳》片恋の譬喩。

生きての名聞、死しての訴へ、何事かこれに勝らん

・夷男（えびすおとこ）が申（まう）やう、「あら忝（かたじけ）な御情（ごじやう）なさけや。生（い）きての名聞（めうもん）、死（し）しての訴（うった）へ、何事（なに）かこれに勝（まさ）らん」とて、三杯（はい）酌（しやく）ぐんで乾（ほ）しにける。『仮名草子』竹齋（ちくさう）上107⑭』《意訳》此の世では名誉（めいよ）であり、死（し）んであの世（よ）に行（い）ったとき、地獄（じごく）の閻魔（えんま）に晴（は）れて報告（ほうこく）ができるという、自分に取（と）つて光榮（こうえい）であることの喩（よ）え。《類》「生きての望（のぞ）み、死（し）しての満（み）足（そく）、何事（なに）か是（こ）にしかん』『妙正物語（めうしやうものがたり）』寛文（かんぶん）二年刊。『生きてのうらみ、死（し）しての歎（なげ）き』『堪忍記（かんにんぎ）』巻第六の四。

生きとし生けるものごとに、夫婦の語らひを知らぬはなし

・人間（にんげん）に限（かぎ）らず生（い）きとし生（い）けるものごとに夫婦（ふうふ）の語（かた）らひを知（し）らぬはなし。まことにこの道（みち）を知らぬは木石（もくせき）に同じ。さは有（あ）ながら、あまり深（ふか）く色（いろ）にふける人は、万事（ばんじ）大（だい）かたになり、家職（けあ）を忘（わす）るゝものなり。『仮名草子集』身の鏡（みよのかがみ）上285⑧』《意訳》この世の中に生（い）を得（え）て生（い）きているものすべてにあつて、夫婦（ふうふ）の語（かた）らひを知らないことはない。

一生の栄花は一睡の夢

・盛者（もろけ）モ衰（おとろ）へ、留者（とどめ）モ久（く）カラズ。一生（いしやう）ノ栄花（えいけ）ハ一睡（いすい）ノ夢（む）ニテ候（まう）ト曰（い）鼻（は）バ、花若（はなわ）殿勝（てんしょう）ダニモトテ、啼々（なみ）院家（いんけ）ニ立（た）皈（か）り、共（とも）ニ栖居（せいこ）（スマイシ）学文（がくぶん）所（しよ）、玉（たま）ハ散（ち）行（ぎやう）露（ろ）ノ窓（まど）、形見（かたみ）ニ殘（のこ）ル水荳（すいず）ノ文（ぶん）者（しや）中（な）々（／＼）恨（うら）也（や）。『386④』

一度には懲をする 二度に死をする

・つし王殿（おうてん）はきこしめし「一度（いちど）には懲（こ）りをする 二度（にど）に死（し）にする」とは姉御（あねご）様の御事（ごじ）也（や）落（お）ちたくは 姉御（あねご）ばかり落（お）ち給（たま）へ さて某（それがし）は落（お）ちまひよの。『説経集（せいきしやう）』さんせう太夫（たふ）』三五〇⑥』《意訳》一度（いちど）目に懲（こ）り懲（こ）りの目（め）にあ（あ）いながら、懲（こ）りず（こ）にいと、二度（にど）目（め）には死（し）ぬ目（め）にあ（あ）うこと。

一眼の亀の浮木に逢ふ

・かの中納言（ちうなごん）殿（てん）の御死骸（ごしがい）しがい、三十餘（さんじゆ）も人の姫（ひめ）たち（たち）に、これを御覽（ごらん）らる候（まう）へとて、引向（ひきむ）けて見（み）せければ、上臈（じやうら）うたちの仰（おほ）せには、「あら嬉（うれ）しやな。この御死骸（ごしがい）を見（み）申（まう）さで消（き）えんは、少（す）し心（こころ）に懸（か）るべきに、今（いま）の最期（さいご）（さいご）に見（み）申（まう）す事（こと）、まことに一眼（いちがん）の亀（かめ）の浮木（うき）に逢（あ）ふが如（ごと）し。優曇華（うだんげ）うどんげも海中（かう）（かう）に開（ひら）きぬるかと思（おも）ふ」とて、御死骸（ごしがい）に抱（か）いだき付（つ）き、いづれも涙（なみだ）にむせび給（たま）ふ。『仮名草子集』恨の介』上六二⑩』《意訳》めつたにない幸運（きんうん）のたとえ。

・牛王（ぎゆうわう）の姫（ひめ）は承（うけ）り 三度（さんど）拌（はん）み奉（ほう）り 喜涙（きなみ）をこぼしつゝ さて／＼二代（にだい）相恩（さうおん）の若君（わがきみ）様（さま）にあふこと 一眼（いちがん）の亀（かめ）の浮木（うき）に逢（あ）ふがごとくなり。『説経集（せいきしやう）』牛王（ぎゆうわう）の姫（ひめ）』四二二②』《典

抛」仏難得値。如優曇波羅華。又加一眼之龜値浮木孔。(ほとけにはあふことうることかたくして、優曇波羅華のことし。また、一眼のかめの浮木のあなにあふがことし。)(『法華経』、『仮名書き法華経』妙莊・西1286⑥、妙1296)。「猶如盲龜値浮木」(『往生要集』

命のあれば海月さへ骨にも逢ふ

・かやうに申せば我命いのち、惜(お)しみ申に似(に)たれども、下臈(げらう)の譬(たと)へに申なる。命(いのち)のあれば海月(くわげ)さへ骨(ほね)ほねにも逢(あ)ふと申也。命長(なが)ながらへ候はゞ、又逢(あ)ひ見む事もありぬべし。『仮名草子』竹齋(上119⑩)『類』海月も骨に逢ふ『毛吹草』意訳(命さえ長ければ、骨のない海月でも骨に逢うという幸運にありつくことができる)。

命全ふ持つ亀は 蓬萊山に逢ふ

・牛王(この由見るよりも)いかに申さん若君様 昔が今にいたるまで 命全(まつた)ふ持つ亀は蓬萊山(ほうらいさん)に逢(あ)ふと聞(きこ)ふ しばらく待たせ給へや 自らは 是より上の醍醐(だいご)といふ所に しゃうしん聖と申て 我がためには叔父なり 君の御ためにも御三代相恩の者なり『説経集』牛王の姫(四二四⑤)『意訳』寿命を全うすれば、得がたき幸運にもめぐり合える。

鰯の頭も仏になる

・老人聞いて、「よき不審にてこそ候へ、あると申せば鰯の頭(かしら)も仏になるなどと思ひて、木の切れ、石の欠けも、尊みすぎて愚かにあさまし。又なきと申せば、神もなく仏もなく天道もなしなどと言ひ、さみして、物事に破れ氣を出され候。『仮名草子集』清水物語(下一七二①)『意訳』つまらぬものでも、それを信仰する人には尊く、神仏と同じ程の靈驗を持つ。『類』鰯の頭も信心から『毛吹草』。

色を見てこそ灰汁をば注せ

・御曹司は聞こし召し 「いかにや申さん上瑠璃君 昔より神にだにも結の神 仏にも愛染明王(あいぜんみやう)やうわう」と聞く時は 一樹(じゆ)の蔭(かげ) 一河(が)の流(ながれ)を汲む事も 他生(たしやう)の縁(えん)と承る 一夜の枕を並ぶるも 五百生(しやう)の縁と聞く 昔より山を見てこそ狩をばすれ 色を見てこそ灰汁(あく)をば注(さ)せ 美しき花を見てこそ枝を折れ 眉目(みめ)よき君があればこそ恋路といふ字はあるぞかし さのみ心な猛かれそ 今夜一夜は靡せ給へや上瑠璃君」とぞ仰せける。『説経集』浄瑠璃御前物語(四八⑬)『類』いろを見てあくをさせ『毛吹草』意訳(染色で色の染め具合を見てから灰汁を加える、むやみに事をはじめないたとえ)。

岩に耳 壁の物言ふ世時

・つし王殿はきこしめし 姉御の口に手を当てて「なふ／＼いかに姉御様 今当代の世の中は岩に耳 壁の物言ふ世時也 自然此事を大夫一門聞くならば さて身は何と成べきぞ 落ちたくは 姉御ばかり落ち給へ さて某は落ちまいよの。『説経集』さんせう太夫(343⑧)『類』壁に耳、岩の物言ふ世時世話焼草。『意訳』物事が漏れやすいことを言う。

美しき花を見てこそ枝をば折れ

・御曹司は聞こし召し 「いかにや申さん上瑠璃君 昔より神にだにも結の神 仏にも愛染明王(あいぜんみやう)やうわう」と聞く時は 一樹(じゆ)の蔭(かげ) 一河(が)の流(ながれ)を汲む事も 他生(たしやう)の縁(えん)と承る 一夜の枕を並ぶるも 五百生(しやう)の縁と聞く 昔より山を見てこそ狩をばすれ 色を見てこそ灰汁(あく)をば注(さ)せ 美しき花を見てこそ枝を折れ 眉目(みめ)よき君があればこそ恋路といふ字はあるぞかし さのみ心な猛かれそ 今夜

一夜は靡せ給へや上瑠璃君」とぞ仰せける。「説経集『浄瑠璃御前物語』四八⑬」《類》「花見て枝をたをる」『毛吹草』《意訳》優美なものに対し心なき所業をすることの意を反対に解する。

上見ぬ鷺

・後に聞侍れば、密通せる男のありて、此本の男を毒害して、上うへ見ぬ鷺(わし)と誇らんと奸(かだま)しき謀(はかり)事にてありしと也。是皆念彼観音の利益なり」とぞ語りける。「仮名草子集『是樂物語』中二三一⑦」《意訳》鷺は眼下の獲物を狙うことに心を配り、上からの襲撃を気にかけないことから、何事も恐れぬ振る舞いをいう。《類》『せわ焼草』

牛は牛連れ 馬は馬連れ

・その方たちも頭をけづり、袈裟・衣を身にまとひ、魚鳥を断ちたまはば、なにと言ひて非道と言ふべき。牛は牛連れ、馬は馬連れといふことあるぞかし。はやはその方たちや、われらに似合ひたる道に基づけ」と言ふ。「仮名草子集『田夫物語』130⑮」《意訳》似たもの同士いっしょに行くのがよいという譬。

・卑しき言葉にも、牛は牛連(うしづれ)、馬は馬連(づれ)といへる言葉あり。政(まつりごと)知(し)る臣下の、心拗(ねじ)けて欲深(ふ)かければ、近寄(ちかより)集(あつ)まる者も、皆(みな)な輕薄(けいはく)なる類(たぐひ)なり。「仮名草子集『清水物語』一五四⑪」《意訳》同類の似たもの同士が集まること。《類》『毛吹草』

牛をば桃林の野に放し、馬を華山の陽に返す

・おほぢ聞て、「あふ、さる事あり。牛をば桃林(たうりん)の野に放(は)なし、馬を華山(くわざん)の陽(やう)に返す。鴨寒(うしむ)うして水に入、鶏(けい)にはとり寒(さむ)うして木に登る。諸法実相(しよほうじつさう)と聞(き)く時(とき)は、峰(みね)の嵐(あらし)も法の声(こゑ)。それをなり共(い)ひとつづ、申(まを)せ」と仰(おほ)せけり。「舞の本『伏見常葉』282⑥」《典拠》帰馬于華山之陽、放牛于桃林之野『書經』武成篇。

氏なふて玉の輿に乗る

・君の長は百人の流れの姫のその中を 三十二人よりすぐり 玉(たま)の輿(こし)に取つて乗(の)せ これは照天の姫の女房達と参らする それ女人と申するは 氏(うじ)なふて玉(たま)の輿(こし)に乗(の)るとは この譬(たとへ)を申なり。「説経集」をぐり』一六七②」《意訳》女は育ちや身分が賤しくても、容貌次第で貴人富家に愛されて出世できるとえ。

優曇華も海中に開きぬる

・かの中納言殿の御死骸を、三十餘人の姫たちに、これを御覧候へとて、引向けて見せければ、上臈(じやうら)たちの仰せには、「あら嬉(よろこ)しやな。この御死骸を見申さで消えんは、少し心に懸るべきに、今の最期に見申す事、まことに一眼の亀の浮木に逢ふが如し。優曇華も海中に開きぬるかと思ふ」とて、御死骸に抱き付き、いづれも涙にむせび給ふ。「仮名草子集『恨の介』上六二⑪」《意訳》めつたにない幸運のたとえ。

鵜の真似して鳥水のむ

・「古の祖師の蜆を御釣りありてまいりしとて、貴僧の若きなりにて其魚を釣りまいらんこと、鵜の真似して鳥水のむ、といひしたぐひ也。扱貴僧は此蜆子和尚の蜆釣りてまいりし御心根を知ろし召けるか。中／＼及びなき事や」『仮名草子集』一休ばなし』三九六③」《意訳》自分の力に余ることあする人という。

運は天にあり

・ある武道無心懸なる侍、「運(うん)は天にあり」。何ぞ武芸によつて勝利あらんや。源の義経は、天狗より兵法を伝(つた)へられたりと語り伝ふ。然(しか)らば義経、合戦に利を失(う)しなわること事は有まじけれども、既に奥州衣川高館の城にして、秀平が子共に攻(せ)められて、滅亡せられしにあらずや。是にて、武士の勝負は運次第といふ事眼前なり。「仮名草子集」身の鏡』下三〇七⑥「意訳」人の運は天命によるもので、人間の力ではどうすることも出来ない。《類》『せわ焼草』。

猿猴が月に愛をなす

・我等如きの類として、たやすく窺ひたまはん事、蟬螂が斧とかや、猿猴が月に相同じ。「謡曲『善界』」《意訳》無理なことを望めばひどい目にあう譬。《故事》天竺婆羅奈城にいた五百の猿が、樹下の井戸に浮かんだ月を見、これをとろうとして手足をとりあつて井戸にさつがて行き、枝が折れて溺れ死んだという譚。

猿猴が水に澄める月影を取る

・これこそ望(のぞ)む所(ところ)よと思ひ、出立その日の装束(しやうぞく)は、地白(ぢしろ)の衣きめに猿猴(ゑんかう)が水に澄(す)める月影(かげ)を取(と)る所を染ぞめたる袷(あはせ)を著(き)、脇差(わきざし)ばかりにて、藁草履(わらざうり)を一足(そく)腰(こし)にをし挟(はさ)み、見え隠(かく)れ御伴(ごばん)ともしてこそ参(まゐ)りけれ。「仮名草子」竹齋』上113⑫「意訳」及ばぬ望みに心を勞する喩えにいう。※上記諺句と共通する。

嬰兒の貝をもつて巨海を量る

・義仲よしなか、其後胤(こうあんにん)として、首(かうべ)を傾(かたぶ)けて年(とし)久(ひさ)しく、今(いま)はこの大功(たいこう)を發(おこ)す事は、たとへば嬰兒(ゑんじ)の貝(かひ)をもつて巨海(ちよかい)を量(はか)り、蟬螂(たうらう)が斧(を)を取(と)つて隆車(りうしや)に向(む)かふがごとし。然りといへど、君のため、国のためにこれをおこす。身のため家のためにして、是をおこさず。志の至神(ししん)に有。「舞の本」木曾願書」208⑩「意訳」幼児が貝殻で大海の水を量るように、不可能なことをすること。《典拠》『漢書』東方朔伝。

負ふ子に教えられ 浅き瀬を渡る

・昔 唐土(から)始皇帝 燕丹太子を取こにし 召籠(めお)めおかせ給ひし時、燕丹嘆きて 始皇帝に「故郷(こきやう)へ歸して賜(たま)ひ給へ 老母(らうぼ)に對面(たいめん)遂(つい)げたき」と 此事(このこと)侘(わ)びての給ふ時 始皇帝の給はく「汝(なんぢ)を國(くに)へ歸(かへ)さんは 鳥(とり)の頭白(くちびろ)くならん其時に 赦(ゆる)して歸し得(え)さすべき」と嘲笑(てうしやう)つての給ふ時 燕丹 是(これ)を悲(かな)しみ 天(あま)に向(む)つて祈誓(いのちかぎ)有(あ)に 親孝行(おやうやう)の心(こころ)ざしを 天(あま)も納受(うけ)やまし／＼けん 鳥(とり)の頭白(くちびろ)く成(な)る 綸言汗(りんげんあせ)の如く 力(ちから)及(およ)ず始皇帝 燕丹を差(さ)し赦(ゆる)し 故郷(こきやう)へ歸し給ふとかや かゝるめでたき吉例(きちれい)有(あ)に 心(こころ)に掛(か)けさせ給ふまじ」と諫(かん)め奉(ほう)れば 吉長(きちぢやう)「げに誠(まこと)知られたり 是(これ)ぞ負(お)ふ子(こ)に教(おし)えられ 浅(あ)き瀬(せ)を渡(わた)るとは 今(いま)此事(このこと)をや申(まを)らん」と 主従(しゅじゆう)二人(ふたり)打連(うちづれ)れ 其儘(そのまま)そこを立(た)出しは 本意(ほんい)なかりける次第(しだい)也。「説經集」一心二河白道(いっしんにがはくだう)』五三二⑦「意訳」不本意で残念なこ

夫の心と川の瀬は一夜に変わる

・上瑠璃斜(うろうりせ)めに思(おも)ひ召(め)し かつと開(ひら)いて見給(みたま)へば 思(おも)ひの外(ほか)に引き替(か)へて 今(いま)を限(かぎ)りの文(ふみ)なれば 肝魂(かんこん)もあらばこそ 天(あま)に仰(おほ)ぎ地に伏(ふ)して 悶(も)え焦(こ)がれて歎(なげ)かせ給ふが 落(お)つる涙(なみだ)の下(した)より も 冷泉(れいせん)を近(き)付けて「いかにや冷泉承(れいせん)はれ 夫(その)の心(こころ)と川(か)の瀬(せ)は一夜(いちや)に変わる」習(な)ひとて 自(みづか)ら振り捨(す)て下(くだ)らせ給ふを 恨(うら)みと思(おも)ふ折節(せつせふ)に 今(いま)を限(かぎ)りの文(ふみ)なれば たとひ自(みづか)ら女(を)にては候(さう)ふとも 冠者(かんしや)の行衛(ぎやうゑ)を尋(たず)ねて 今(いま)生(な)にて今(いま)一度(いちど) 對面(たいめん)申(まを)さんと思(おも)ふなり 冷泉(れいせん)いかに」仰(おほ)せけ

り。「説経集」浄瑠璃御前物語』81①「《類》「おとこの心と川のせは一やにかはる」『毛吹草』《意識》「男心の変わり易きたとえ」

親子は一世の契り 夫婦は二世の契り

・古き歌にも ▲出て去なば心軽しと言ひやせん世の有様を人の知らねば と申伝へし言の葉 自らが身の上也 親子は一世の契りなれば 幾程も添ひ参らせず 不孝と思召さるべし

此代の不孝は 後の代の孝行共也参らせん 是は父母の御方へと 涙ながら書き留め 扱又 夫の吉長へは 夫婦は二世の契りと言へば 此世の縁こそ薄く共 来世は必一つ蓮の台に至り 長く見みへ参らせん 古言の葉に 急げとよ涙を文に巻き込めて其儘送る墨の干ぬ間に と詠みしと思ひ知られたり。「説経集」一心二河白道』524④⑧「《類》「親子は一世、師は三ぜ、夫婦は二世のちぎり」『毛吹草』

恩は山岳よりも高く、徳は芝蘭よりも芳し

ねがはくは、わか君(き)月の六齋日二季(き)の彼岸(ひかん)には、日本国中(にっぽんこちゅう)にせつしやうを御きんだんあるべし。一さい衆生(しゅじやう)ハみな生々の父母(ちやうふ)なり。世々乃兄弟(きやうだい)なり。をんハ山岳(さんかく)よりもたかく、とくは芝蘭(しらん)よりもかうばし。しかれ共、生をへだてゝむまれ、かたちをむじんにあらためぬれば一室にむまるゝといへともさらにわきまへしらず、あはれなるかな、迷情(めいじやう)流轉(るてん)乃ならひ、忍愛(にんあい)餘習(よし)にひかれ、おほくハ畜生(ちくしやう)と成て片々(へんへん)たる山野(さんや)をすみかとし、漫々(まんまん)たる紅海(かうかい)をいゑとするものなりとときたまひければ、君も臣(しん)もおほきに隨喜(ずいき)あつて、このよし天下に御ひろうありければ、日本(にほん)國中(こくちゅう)をこなへて、浦々(うらうら)嶋々(しまく)にいたり、せつしやうきんだんある事、太子御(こ)入滅(にうめつ)以後(いご)七百余(よ)歳のいまにいたるまで、かの御まつりごとさらにたいてんなし。『聖徳太子傳』卷第二・七歳、六齋日(さいにち)之事9才⑨」

風の前の灯

をよそ三江(こう)の心龜(れいき)もかくれ、九澤(きゅうたく)乃仙鶴(せんかく)もかへり、去十返(とかへり)盛(さかん)なる松花もつゐにはかれ、二度(ふたたび)あらたまる椿葉(ちんよう)もかならずしほむ。五欲(よく)の無常(むじやう)ハ花乃上(かうのう)の露(つゆ)三界(さいかい)の果報(くわほう)は風の前(まへ)乃灯(ともしび)となる。すみやかに入べき物は菩提(ぼだい)の道(みち)、はやく出へき物は生死(しやうじ)乃郷(さと)なり。たとひ輪王(りんわう)の果報(くわほう)たりといふとも行(きやう)ぜずんば何(なん)ぞ楽(たのしみ)とするにたらん。『聖徳太子傳』卷第八・卅九歳⑨」

蝸牛の角めだち

・安祿山も楊国忠も、いづれ衰劣(そりやく)をとり侍らぬ佞悪無道の臣なれば、祿山は国忠が国に威を振ふ事を嫉(そね)み、楊国忠は祿山が天下に権を專とする事を妬(ねた)み、心に蝸牛の角(つ)のめだち、互(たがひ)に争(あらそ)ひの煙(けぶり)を胸(むね)に焚(た)きける。「仮名草子集」是樂物語』中二三⑦「《意識》「蝸牛の角あらそい。つまらぬことにこだわり争う」

蟹は甲に似せて穴を掘る

・誠に蟹は甲(か)に似(に)せて穴(あな)を掘(ほ)るとかや。長松や次郎吉までが兄分を拵(へ)、御敵をたくはへ、三藏やお夏迄も背戸の片隅、湯殿の陰にても以為を口説きて、それ／＼の心ざしを述ぶるなり。「仮名草子集」都風俗鑑』四三二⑩「《意識》「自分の力量に応じる」

鴨は寒じて水に入る 鶏は寒ふて木へ登る

・「なふ いかにかに父の横山殿 これは譬(たと)へて御ざなひが 鴨は寒じて水に入る 鶏は寒ふて木に

登る 人は滅びようとて まへなひ心猛うなる 油火は消えんとて なをも光が増すとかの

あの小栗と申するは 天より降り人の子孫なれば 力は八十五人の力 荒馬乗つて名人なれば それに劣らぬ十人の殿原達は さて異国の魔王の如くなり「説経集」をぐり」一八二⑦

・おほち聞て、「あふ、さる事あり。牛をば桃林(たうりん)の野に放(はな)し、馬を華山(くわざん)の陽(やう)に返す。**鴨(かも)寒(さむ)うして水に入、鶏(に)はとり寒(さむ)うして木に登(のぼ)る**。諸法実相(しよほうじつさう)と聞(き)く時(とき)は、峰(みね)の嵐(あらし)も法の声(こゑ)。それをなり共(ひと)つづ、申(まを)せ／＼と仰(おほ)せけり。「舞の本『伏見常葉』282⑥」《類》『毛吹草』、天草本『金句集』。《意訳》それぞれの生まれつきによつて、その行動も異なる。万物にそれぞれ特性のあることの喩え。

鳥の頭が白くなつて 駒に角が生ゆる

・君の長は聞こし召し 「さても汝は憎い事を申よな いにしへ流れを立ていと申その折に 流れを立つるものならば 三日の事はさて措(はか)ひて 十日なりとも暇取らせんが **鳥の頭が白くなつて 駒に角が生ゆる**とも 暇(ひま)にをひては取らすまひぞ 常陸小萩(ところは)とぞ申なり。「説経集『をぐり』二二四①」

・昔 唐土始皇帝 燕丹太子を取こにし 召籠めおかせ給ひし時、燕丹嘆きて 始皇帝に「故郷へ歸して賜(たま)ひ給へ 老母に對面(たいめん)遂げたき」と 此事侘びての給ふ時 始皇帝の給はく「汝を國へ歸(かへ)さんは **鳥の頭白くならん**其時に 赦(ゆる)して歸し得(え)さすべき」と嘲笑つての給ふ時 燕丹 是を悲しみ 天に向つて祈誓(いのちかざ)しを 親孝行の心ざしを 天も納受(うけ)やまし／＼けん **鳥の頭白く成** 綸言汗(りんげんあせ)の如く 力及(りきおよ)ぶ始皇帝 燕丹を差し赦(ゆる)し 故郷へ歸し給ふとかや かゝるめでたき吉例有(よしあり) 心に掛けさせ給ふまじ」と諫め奉れば 吉長(きちぢやう)げに誠知(まことし)られたり 是ぞ負ふ子に教えられ 浅き瀬(あさき)を渡るとは 今此事をや申らん」と 主従二人打連れ 其儘(そのまま)そこを立出しは 本意(ほんい)なかりける次第也。「説経集」一心二河白道(いしんにがわはくどう)五三二②

・**牴乳(ていり)一牴(ひと)ハ、雄羊(ゆうやう)ソ。乳(り)セバ、ヲヒツシガ子(こ)ニラ生(な)タラハ、歸(かへ)フズト云(い)タソ。是(こ)ハ太子丹(たいてい)ガ、鳥ノ頭(くび)ノ白(しろ)ナリ、馬(うま)ニ角(かく)ニシラ生(な)ト云(い)タト、同(どう)シヲソ。師古(しこ)曰(い)フ、牴(てい)ニシテ牡羊(ぼやう)也(なり)。牴(てい)不(ふ)當(たう)産(さん)乳(り)ニ一故(い)設(せつ)ニ此言(こゝのいひ)ニ示(し)絶(ぜつ)。其事(このこと)若(ごと)燕(えん)太子丹(たいてい)鳥(とり)ノ白(しろ)頭(くび)、馬(うま)ノ生(な)角(かく)ノ比(ひ)也(なり)。『蒙求抄』卷六蘇武持節(そぶし)58⑨」《典拠》「燕丹求(もと)メ歸(かへ)ル。秦王(せいおう)曰(い)フ、鳥頭(とりくび)白(しろ)、馬生(うまな)角(かく)、乃(すなは)ち許(ゆる)耳(なり)」「史記(しき)刺客列伝(さくしやくれつでん)註」《類》「鴉の子(えびす)が白(しろ)くなつて駒(こま)に角(かく)が生(な)いんほど待候(まちこう)へよ」舞曲(まいく)『鎌田(かまだ)』《意訳》ありえないことの喩え。**

勸学院の雀は、蒙求を轉り、智者の辺りの童べは、習はぬ経をよむ

・判官、聞し召されて、「もの聞給へ、方(かた)／＼。『勸学院(くわんがくいん)の雀(すずめ)は、蒙求(もんぐ)をよむ』(もふぎう)を轉(ま)り、智者(ちしや)の辺(へ)ほとりの童(わらわ)は、**べは、習(なら)はぬ経(きやう)**(きやう)をよむ」とは、よくこそ是は伝(つた)へたれ。小賢(こけん)こざかしき童(わらわ)はべに引出物(ひきだすもの)を取らせ、これより奥(おく)、平泉(ひらいづみ)への順道(じゆんだう)を詳しく問(と)へ。「舞の本『富樫』378⑤」《意訳》常に見たり聞いたりすることは、自然に覚えてしまう。

雁が飛べば石亀殿も地団太

・又(また)こゝにおかしき事あり。**雁(かり)が飛(と)べば石亀殿(いしがめ)も地団太(ぢだんだん)**とやらん。見えぬ和郎(わらう)に姿(すがた)のよく見ゆるがあり、足早(あしはや)に追ひ付きて前から見て、二度びつくりするも侍り。「仮名草子集『都風俗鑑』四六二④」《意訳》身のほども知らず、到底叶わぬことで他人の真似をする喩え。《類》「雁(かり)がとべはいしがめもちだんだん」『毛吹草』。

雁も鳩も食ふたるものこそ知らめ

・彼(か)のいぶせき所にて朝催(もよ)ひ気味(きみ)よく食(た)べ侍るも、余(よ)の所のむつかしき筵(むしろ)に列(つら)なりて、七五三にて持(も)て成(な)さるゝよりも、しみ／＼と身に入(い)るばかり味(あじ)あるらんと思(おも)ひやるも、「実に雁も鳩も食(く)ふたるものこそ知(し)め」と、彼(か)の綴蓋(とぢぶた)に破鍋(われなべ)の思(おも)ひに身(み)を焦(こ)がせし。「仮名草子集『是樂物語』下二五三^⑬」
《意訳》雁の肉も鳩の肉も、どちらがうまいかは食べたものでなければわからない、すべて経験がものを言う。

昨日は今日の昔

・昨日(きのふ)は今日(けふ)の昔(むかし)なれば、昔語りとや申しはべらん。「仮名草子集『露殿物語』五〇^⑫」
《類》「昨日は今日の昔『毛吹草』」。

錐は袋を通す

・然れども好事門を出でず 悪事千里を走る 錐は袋を通すとて 都わらんべ漏れ聞ひて
二条の屋形の小栗と深泥池の大蛇と夜な夜な通ひ 契りをこむるとの風聞なり。「説経集」を
ぐり』一六七②」《典拠》「譬若錐之处囊中『史記』平原君伝」

九牛が一毛

・此博奕(ばくあき)、傾城狂(ぐる)ひのついでと、俳諧(はいかい)のついでをくらべてみれば、九牛の一毛ならん。又歌道(うたみち)を知(し)らぬ人の物云程(ものいひほど)おかしき事はなし。「仮名草子集『身の鏡』下三〇八^⑩」
《意訳》比較できないほど少ない部分。《類》「毛吹草」。

薬人を助く 薬師人を殺す

・古人も云らずや。「古方(こほう)今病(いまびやう)に不(ふ)合(あ)ひ、薬(くすり)人を助(たす)く、薬師(くすりし)人を殺(ころ)す」などいへる諺(ことわざ)有(あ)り。「仮名草子集『是樂物語』上一九九^⑭」
《意訳》物は使いようで使う人によつて薬は毒にもなり、人を殺すことさえある。《類》「毛吹草」。

愚人夏の虫 飛んで火に入る

・小栗(こ栗)この由御覧(よしごらん)じて 愚人(ぐふじん)夏の虫(なつむし) 飛んで火(か)に入る 笛(ふえ)に寄る秋(あき)の鹿(か)は 妻故(つまこ)にさてその身を果(は)たすとは 今こそ思(おも)ひは知られたれ 小栗(こ栗)こそ奥方(おくはう)へ 妻故馬(つまこば)の秣(もく)に 飼(か)はれたなむとあるならば 都(みな)の聞(きこ)いも恥(はづ)かしや 是非(せひ)も更にわきまへず。「説経集」をぐり』一八五^⑬」
《類》「愚人は夏の虫、飛で火に焼とぞながめさせ給ひける『源平盛衰記』八・法皇三井灌頂。『夏の虫とんで火に入、秋の鹿の笛に心をみだし、身をいたづらになす事』『曾我物語』六・仏性国の雨の事』《意訳》愚者は自ら我が身を危地に陥れること。」

雲に梯 霞に千鳥

・上瑠璃(るり)此由(こよし)聞(きこ)し召(め)し たゞ何ともなく 「雲に梯(か)けはし 霞(かすみ)に千鳥(ちどり)」とありければ 御曹司(ごそうし)さうしは聞(きこ)し召(め)し 「雲に梯(か)けはし 霞(かすみ)に千鳥(ちどり)」とは 及ばぬ恋(およばぬこひ)との御錠(ごじやう)ぢやうかや 及ばぬ恋(およばぬこひ)とは 日本(にっぽん)の者が唐土(たうど)たうどの人を恋(こ)ふるかや 唐土(たうど)たうどの人が日本(にほん)の者を恋(こ)ふるかや 人間(にんげん)にんげんが神(かみ)や仏(ほとけ)を恋(こ)ふるこそ 及ばぬ恋(およばぬこひ)にてあるべきに 人が人を恋(こ)ふるには 及ばぬ恋(およばぬこひ)にて更(さら)になし」説経集『浄瑠璃御前物語』四六^⑮、四七^①」
《意訳》雲に梯の到底掛けられないことや、千鳥が努めても霞の高さに及ばないことのたとえ。他に「霞に千鳥を」霞は春、千鳥は冬」という季節の相応しないたとえにもいう。

吹毛不可求疵

「毛(け)を吹(ふ)きて疵(きず)を求(もと)むべからず」平安時代の諺

・能にむくやぎと云は、用也。花だにあらば、むくやぎ迄も入まじき也。むくやぎなきと云は、まづは毛を吹きて疵を求たる也。『世阿弥申楽談儀』二七三⑬《典拠》「不吹毛而求小疵」韓非子『意訳』あらさがしをすること。※『管蠡抄』第七に「吹テレ毛ヲ求レ疵ヲ 漢書」〔龍門文庫蔵521頁〕。

芸は主をさげず

・君の長は、聞し召し「和御前(わごぜ)は、東海道の名折(なをり)を申ものかな。芸(げい)は主(ぬし)をさげず。泥(でい)の中の蓮(はちす)、知るを人倫(じんりん)といひ、知らざるを鬼畜(きちく)に譬(たと)へたり。いかに吉次が連れたる京藤太(きやうとうだ)と申共、吹(ふ)けばこそ笛(ふえ)をば差すらめ。調子(てうし)一つ所望(しやうぼう)せよ。『舞の本』烏帽子折』320⑭《意訳》一芸に秀でることは身分や貧富とは無関係である。

賢臣二君に仕へず、貞女両夫に見へず

・風吹けば沖つ白波竜田山夜半にや君がひとり行くらん と、かやうに詠じたりければ、男、この由聞よりも、「賢臣(けんしん)二君に仕(つか)へず、貞女(じやうにょ)両夫(りやうふ)に見(み)へず」と、今こそ思ひ知られたれ。姿掛りの勝(まさ)さる女はありとても、心(こころ)の勝(まさ)さる女房(ねうぼう)のありつべしとも覚えず」とて、河内通(かよひ)を思(おも)ひ切(きり)、古(ふる)き妻にぞ契(ちぎ)りける。『舞の本』伏見常盤』280④《典拠》「忠臣不事二君、貞女不更二夫」『史記』田単伝。

好事門を出でず 悪事千里を走る

・然れども好事門を出でず 悪事千里を走る 雖は袋を通すとて 都わらんべ漏れ聞ひて 二条の屋形の小栗と深泥池の大蛇と夜な夜な通ひ 契りをこむるとの風聞なり。『説経集』をぐり』一六七①《典拠》「好事不出門、悪事行千里」『伝灯録』北夢瑣言《意訳》良い事は世間に判らないが、悪い事は千里の外までもすぐに知れわたる。

心を正直に持ち、邪なくば祈らずともよかるべし

・今時の人の仏神を信ずるを見るに、正心(しやうしん)は毛頭(もうとう)もなく内悪(うちあく)をかまへ仏神(ぶつじん)を拝む。是愚かなる事どもなり。たとひ礼拝し、香花(かうか)を手向けずとも、心を正直(しやうじき)に持(も)ち、邪(よこしま)なくば祈(いの)らずともよかるべし。古歌にも、「心(こころ)だに誠(まこと)の道(みち)にかなひなば祈(いの)らずとも神(かみ)や守(まも)らん」と有、物事に本末(ほんまつ)あり。『仮名草子集』身の鏡』下三〇八⑩《意訳》「類」『正直のかうべに神やどる』本朝俚諺。

後鳥羽の朝の時、通具・定家・家隆・有家・雅經五人撰新古、今不
足于二千首、序云、一千首同時、有慈圓、後京極時に摂政也、
定家・家隆は哥作、慈鎮・西行は哥讀。

・後鳥羽の朝の時、通具(みちもと)・定家(さだけ)・家隆(けいりゅう)・有家(けいけ)・雅經(みやへい)五人撰新古、今不足于二千首、序云、二千首同時、有慈圓、後京極時に摂政也、定家・々隆は哥作、慈鎮・西行は哥讀。時之諺也。『蕉軒日録』下二二二③

子は三界の首枷

・十王経説に曰く、『一日のうちに墮獄の人一万人あり。即ち女人七千八千にして、男子二千なり三千なり』と言ふ。そのゆゑに我朝の祖師たちもきらひたまひて、多くの山々、寺々へも戒めたまへるなり。男子をきらひたまふところを聞かず。ちうしんかうれんほうなども子孫あることをきらひたまはずや。子は三界(さいがい)の首枷(くびかせ)とこそうけたまはれ。されば一角仙人は女を以つて仙術を失ひ、我朝久米の仙人も女の物洗ふ脛を見て通力を失ひたまふとかや。かくのごとくなる悪人を何として好くや。『仮名草子集』田夫物語』三⑫《意訳》親は子どもへの愛

にひかされて一生の間苦勞の絶える時がない。

・又親と子は一世の契(ちぎり)、本来親(おや)と言ふべきものなし。親(おや)のなければ子もなし。草葉に置(を)ける露のごとし。縁(えん)にふれて親(おや)といひ子といふ、子は三界(がい)の首枷(くびかせ)なり。親(おや)子の道(みち)を尽(つく)しても来世の爲(ため)に益(えき)なし。「仮名草子集『清水物語』一六八③」《意訳》子を常に思う心にひかされた親が、その生活を一生の間束縛されること。「三界」は、欲界・色界・無色界の人間生存の迷いの世界。《類》『毛吹草』。

侍と黄金は 朽ちて朽ちせぬ

・聖此由聞召。「まだ百日もたぬ間に。世に出給ふめでたさよ。侍(さむらい)と黄金(こがね)は。朽ちて朽ちせぬとは この事をや申らん」と。御喜(よろこび)は限(かぎり)なし。「説経集『さんせう太夫』三七五⑩」《類》「人は一代名は末代、侍と金(こがね)は朽ちて朽ちせぬ、鷹はしぬれど穂をつまぬ『毛吹草』」

去るものは日々に疎し

・去(さ)るものは日々(ひ)に疎(うと)しといへど、友名は猶日々に思(おも)ひに沈(しづ)み給へども、人に隠(かく)せる事なれば、精進(しやうじん)なども心に任(まか)せえず、たゞ物(もの)のこの文目(あやめ)も分(わ)かず、十七日は神(かみ)じやうしの様(やう)に事寄(よ)せ、又念(ねん)比(ひ)なる友達(だち)の中に朝夕(あさゆふ)を食(た)べ給へるとかや。「仮名草子集『是樂物語』二六八⑮」《意訳》死んだ者は月日がたつに連れ、だんだんと疎遠(そえん)になっていくものである。

知るを人倫といひ、知らざるを鬼畜に譬ふ

・君の長は、聞(き)し召(め)し「和御前(わごぜん)は、東海道(とうかいどう)の名折(なをり)を申(まを)ものかな。芸(げい)は主(ぬし)をさげず。泥(でい)の中の蓮(はぢす)、知るを人倫(じんりん)といひ、知らざるを鬼畜(きちく)に譬(たと)へたり。いかに吉次(きちじ)が連(れ)れたる京藤太(きやうとうた)きやうとうだと申共、吹(ふ)けばこそ笛(ふえ)をば差(さ)すらめ。調子(てうし)一つ所望(しやうぼう)せよ」。「舞の本『烏帽子折』320⑫」《意訳》人の真価(まけ)や才能を知るのは難しいことのとえ。

白き骨は父の恩、肉叢は母の恩

・さればにや、人の子の、胎内(たいない)に宿(やどり)、胤(たね)を下(お)ろす謀(はかり)ことは、梵天(ぼんてん)よりも糸(いと)を下(お)ろし、大海(かい)の底(そこ)なる針(はり)の耳(みみ)を通(と)をすより、なを受(う)け難(がた)ふて儲(も)うけたり。二百七十余日は、胎内(たいない)に宿(やどり)、神仏(ほとけ)にも忌(い)まれ申、九品(ほん)の浄土(じやうど)へ参(まゐ)る事もなし。偶(たま)／＼、人に生れくる、其時の苦しみは、生きたる牛の皮を剥(は)ぎ、せんからたちの其中へ、追ひ入るゝより堪(た)難(がた)し。玄冬素雪(げんとうそせつ)の冬の夜は、衾(きん)を重ね、育(そだ)めり。九夏三伏(くげさんぷく)の夏の夜は、松風(しょうふう)に戯(たは)ぶれて、空吹く風を招き寄せ、をよそ産子(さんし)を育(そだ)めり。三歳になる迄飲(の)みける乳味(にうみ)、凡夫(ぼんぷ)、いかでか知るべきぞ。忝(かたじけなく)も、釋尊(しやくそん)、檀特山(だんとくせん)の傍(かたは)らにて、静かに算段(さんだむ)して見給ふに、をよそ一百八十石(ひゃくはちいそく)にしるさるゝ。此理(ことわり)を聞く時(とき)は、白(しろ)き骨(こ)は父(ちち)の恩(おん)、肉叢(にくそう)は母(はは)の恩(おん)。報(はく)しても報(はく)じ難(がた)きは父の恩と説かれたり。謝(あやま)しても謝(あやま)し難(がた)きは母の恩と、説かれたり。慈父恩高如須弥山、悲母恩深如大海。いづれを報(はく)じ尽くすべきぞ。『舞の本』和田酒盛』478⑪」

・あふ、汝らが聞知らざるは道理(だうり)だうり。いで／＼、語(かた)聞(き)かせん。『我八(がはち)といふは、腹に七つの子を持つて、我が身共には八つなり。七つの子を弓箭(きうせん)に懸(か)けん事を悲しみ、唱(とな)えたる文(もん)にて有。』『龜八万劫必生安樂国、龜成仏』と唱ふるは、龜は万劫

(こ)うを経ぬれば、必仏になると申に、只今(いま)、弓箭(きうせん)に懸(か)こり、仏体を破(やぶ)らん事を悲しみ、唱(とな)へたる文にて有。されば、人の子(この胎内(たいない)に宿(やど)り、胤(たね)を下(お)ろす謀(はか)り事は、梵天(ぼんてん)よりも糸(いと)を下(お)ろし、大海(かい)の底(そこ)なる針(はり)の耳(みこ)を通(と)をすよりも受(う)け難(がた)ふて、生(む)まるゝなり。白(しろ)き骨(ほね)は父(ちち)の恩(おん)、肉(にく)叢(しむら)は母(はは)の恩(おん)。父の恩(おん)が卑(ひ)しくは、四苦(しつくと)名付て、中(なか)なる骨を抜(ぬ)き捨(す)てよ。母(はは)の恩(おん)が卑(ひ)しくは、八苦(はく)と名付て、赤(あか)き肉叢(しむら)を削(そ)ぎ捨(す)てよ。此理(こと)はりに任(まか)せて、其亀(かめ)を助(たす)けよ。「舞の本『小袖曾我』501⑩」⇨鎌倉時代の諺、「白骨は父の恩、赤肉は母の恩」七卷本『寶物集』第六を参照。

親子の縁はたゞ一世

をよそ親(しん)子の縁(えん)はたゞ一世(いっせい)といへとも、骨肉(こつにく)の因(いん)まことに多生(たしやう)の契(ちぎ)りなる物をや。恩愛(おんあい)乃心(なりこころ)には身をすて子(こ)をあはれむ、いつくしみのおもひには命(いのち)を捨(す)る事は、常(つね)の人(ひと)乃ならひ也。『聖徳太子傳』卷第八・卅九歳「才⑥」

好きに赤烏帽子

・昔夷屋吉郎兵衛、右近源左が女形として流行らせし折には、手拭に等しき絹切(ぎれ)を被(かぶ)りて女形(がた)とこそいひしに、今は又何者か仕出しけん、銅をもて甲を拵(こしら)へ、それに髪をうへて鬘(かづら)と名付けて被り、舞奏(かなで)ければ見よけれど、是を外しては、尾抜鳥の如くなれども、好(す)きに赤烏帽子(あかぶさ)、迷(まよ)ひ初にし恋の山、元(もと)この道にし帰る事難(かた)ければ、堪(た)へまじき節(ふし)にもよく堪(た)へ焦(こ)がれて、どふもならぬと嬉(うれ)しければ、是非はくだなりとて、智(ち)もあるも愚(おろ)かなるも、分(わ)くかたなく迷(まよ)ふ事、無明煩惱(むみやうぼんのう)の絆(きづな)ほど世に草臥(くたび)れた物はなさそうなり。『仮名草子集』都風俗鑑「四六二④」《意訳》烏帽子は普通黒塗りであり、赤などと変わった色物を好むたとえ。

千石万石も、飯一盃

・アラモトカシヤト云へトモ。道ヲ楽デ居テ。結句貧ニモナイソ。上竿ノ奴モ。アブナイコトヲシテノ用ハ。ソレモ貧ヲ。ニギヲサントノ。義ナレトモ。千石万石モ。飯一盃ト云ヘル。諺ノアルナレバ。漢陰ノ叟モ。事ハカネヌソ。當世人ノ心ニ。種々ノアヤツリ多クシテ。人ヲシヲトシテ。我身ヲ持ントシテ。アブナイコトヲシテ。トリハツセハ。上竿ノ奴ノ竿ヨリ落テ。身ヲ害スルヤウニ。害ニ逢フコトヲソシル也。『中華若木詩抄』卷下2957」

詮なき衆生に事問はず

・昔より刀剣と申せども 科なき岩の鎬は削らぬ物 詮なき衆生に事問はずと こそ譬の候ぞや。『説経集』浄瑠璃御前物語「四五③」《類》「縁なき衆生は度し難し」《意訳》何の益もない衆生に物を質ねても無駄であるから問わない。

善には人の連れがたし 悪には人の堕ちやすし

・折節その頃 釋尊は檀特山にをはしますが 此由をきこしめし「あさましや いとゞだに善には人の連れがたし 悪には人の堕ちやすし」 あの長者をこの国に置くならば 四方の衆生は皆魔道たるべし その儀ならば 是非これに障礙をなさん」と宣ひて 第六天の魔王達を頼ませ給ひて「いかに魔王達 あの長者に障礙をなして賜ひ給へ」と仰せける。『説経集』阿弥陀の胸割「三九一⑬」《典諺》「人は善と言へば遠のき、悪と言へば近づく」『仮名草子集』竹齋」

園生に植ゆる紅は、包めど色の増す

・十二の春はるまでの事なるに、此姫(ひめ)貌(み)いつくしく、言(い)ふに絶(た)えたる事なれば、自(みづ)から一(ひと)つ心(こころ)にて包(つつ)み申(まを)せども、**園生**そのおに**植**う**ゆる紅**くれなゐは、**包**つつ**めども色**いろの**増**ます風情(ふぜい)、この姫(ひめ)都(みやこ)に隠(かく)れ無(な)し。『仮名草子』恨(いの)の介(け)』上65⑧『**類**』**紅は園生に植ゑても隠れ無し**』『謡曲』頼政(頼政)』**意訳**勝れた物は、どこに居ても直ぐに目立つ意。

旅は心 世は情

・照天(てると)この由(よし)聞(き)こし召(め)し 「なふ いかに長殿様(ちやうどのさま) これは譬(たと)たとへて御(ご)ごなひが 費長房(ひちやうぼう) 丁令威(ていれい)は 鶴(つる)の羽交(はがい)に宿(やど)を召(め)す 達磨尊者(だるまそんじや)のいにしへは 蘆(あし)の葉(は)に宿(やど)を召(め)す 張博望(ちやうぼう)のいにしへは 浮木(うきぎ)に宿(やど)を召(め)すとかや **旅**(たび)は心(こころ) **世**(よ)は情(なさけ) さて廻船(かいせん)は浦(うら)がかり 捨子(すてこ)は村(むら)の育(はぐく)みよ 木(き)があれば鳥(とり)も棲(す)む 湊(みなと)があれば舟(ふね)も入(い)る 一時雨(しぐれ)一村雨(むらさめ)の雨宿(あまやどり) これも百生(しやう)の縁(えん)とかや 三日の暇(ひま)も給(たま)はるものならば 自然(しぜん)後(のち)の世(よ)に君(きみ)の長(ちやう)夫婦(ふうふ)御身(み)の上(う)に 大事(だいじ)のあらんその折(おり)は引(ひ)き代(かは)り自(みづか)ら身代(みがは)りになりとも立(た)ち申(まを)さうに 情(なさけ)に三日の暇(ひま)を給(たま)はれの『説経集』をぐり』224⑤『**類**』旅は情人は心と申すが『狂言』薩摩守』**意訳**旅にあつては心の持ち方が大事で、世間を渡るには人情が頼み。

・御台此由(こゝ)こしめし「なふいかに太夫(たゆう)殿(だん) これは譬(たと)たとへてなければ共 費長房(ひちやうぼう) 丁令威(ていれい)は 鶴(つる)の羽交(はがい)に宿(やど)を召(め)す 達磨尊者(だるまそんじや)の葉(は)に召(め)す **旅**(たび)は心(こころ) **世**(よ)は情(なさけ) さて大船(たいせん)は浦(うら)がかり 捨子(すてこ)は村(むら)の育(はぐく)みよ 木(き)があれば鳥(とり)が住(す)む 湊(みなと)があれば舟(ふね)も寄(よ)る 一通り(一通り)一時雨(しぐれ)一村雨(むらさめ)の雨宿(あまやどり) 是も多生(たしやう)の縁(えん)と聞く。それ女(め)人と申(まを)すは。七日七夜(しちにち)忍(しの)べ共 忍(しの)べ忍(しの)ぶ習(な)り。今夜(こんや)一夜(いちや)忍(しの)ばふは。易(やす)ひ事(こと)。ひらさら一夜(いちや)」と借り給(たま)ふ。『説経集』さんせう太夫(たゆう)』324⑫『**解釈**』上記(じょうき)をぐり』の口上(くわうじょう)と表現(ひょうげん)形態(けいぎ)を同じくする。

断金のちぎり

時に、太子(たうし)まつ御心中(ごしんちゆう)を御兄弟摩呂子親王(ごけいあにりしんおう)になく／＼かたりたてまつり給ひけるに、ことわりにも過(あやま)りともことなる御事(ごじ)共也。抑(おさ)り、兄弟**断金**(だんきん)の**ちぎり**あさからさる御事(ごじ)なれば、我身(われみ)のなけきはおなし御身(ごみ)の歎(なげき)なるへし。『聖徳太子傳』卷五・太子御元服事(みもとふくじ)22ウ⑨」

地獄沙汰も錢でする

・禪祿二(ぜんろくに)举起(きよ)白水真括頭圓成黄面老子ノ功德トアリ。錢ヲアゲ用テ黄面ハ仏ノヲ。仏ノ功德仏事ヲ成就シタ心ソ。錢ヲ以テ仏事ヲシタ心ソ。**地獄沙汰モゼニデスル**ト云々。同ソ。『惟高妙安』玉塵抄』卷三十八、十六255①」

・使(つか)鬼錢安用人間(にやうじん)――『谷』鬼ト云ハ神ヤ又ハ死人ノヲ。神ニイノリ祈禱ヲシタリ亡者ヲトムラニ物ヲ入テツカウヲ。地獄の沙汰も**錢デスル**ト云々。ソノツレハ用ヌト云心ソ。『惟高妙安』玉塵抄』卷三十八、十六270⑥」

忠言耳に逆ひ、良薬口に苦し

・その時、鼠答へてはいはく、「われらも、御譬(たと)へのごとく存じて、若き鼠どもに、異見(いけん)をなすといへども、忠言(ちゆうげん)に逆(さか)ひ、良薬(らうやく)に苦(くる)にがしと申せば、なかなか聞きも入れず、なほなほ悪逆仕(つかまつ)らんと申す。《御伽草子》『猫の草子』371

⑫《意訳》いましめのことは耳に聞き入れられず、よい薬は口に苦く感じられる。《典拠》孔子曰、良薬苦於口、而利於病、忠言逆於耳、而利於行、《孔子家語》四。

長者二代なし

・ある人云出侍るは、「世話に長者二代なしといひて、大方は楽(たの)しき人の子は、後に貧(まづ)しくなり侍るは、いかなる道理ぞや」と問ひ侍れば、是樂が曰、「それは、金銀を得る事の為難(しがた)きを知らぬ故(ゆへ)、必ず富貴なる人の子は其様(やう)になれり。『仮名草子集』是樂物語」中二四〇⑮」《意訳》金持ちは苦勞知らずの二代目が継ぐので長続きせず没落してしまうことが多い。《類》『毛吹草』。

塵積もつて山となる

・「公家、殿上人のやうにこぬるきわざなり、連歌、俳諧(はいかい)を^{〃〃}ラウサイ顔(がほ)にて案ぜんよりは、高枕(まくら)にて寝たるこそましならめ、殊(こと)に今時俳諧(はいかい)の点取とて、一句を二銭三銭づゝにて、宗匠に見(み)するなれば、百韻にては銭二三百のつゝへ、塵積(ちんせき)もつて山となるといへば、年月の俳諧(はいかい)のつゝへ限(かぎ)りなし、あたは銭を捨(す)てたくば、門を通る乞食(こじき)やうの者にもくれたらば慈悲にもなるべし」といふ多し。『仮名草子集』身の鏡」下三一〇③」《意訳》少しのものも多く集まつて山の如く大きく見える。《類》『北条氏直時代謄留』。

手を空しうせる宝の山

・昔(むかし)より誓紙(せいし)の案文(あんぶん)「もん」を、商人の物(もの)を値切(ねぎ)るやうにせるといふは、いと珍(めづ)らしき恋路也。これより後友名逢(あひ)給へども、たゞ徒(いたづ)らに眺(なが)め暮(くら)し給ふも、手を空(む)なしうせる宝(たから)の山(やま)なるこそ残(のこ)り多けれ。『仮名草子集』是樂物語」中二四〇⑮」《意訳》よい機会に巡りあいながら利益を得ることが出来ない。宝の山に入りながら空しく帰る。《類》『毛吹草』。

天に口なし、人のさえずりをもつて事とす

これハ空(そら)に住(すむ)惑星(けいこしやう)と申星(ほし)にて侍り。彼(かの)星もし下界(かい)の人間(にんげん)にいくさひやうらんおこり飢渴(きかつ)不熟(ふじゆく)等(とう)のさいなん出現(しゆつげん)せんとしてハその星どうじ乃かたちをけんじて人間にあまくなり、世中(よのなか)のおさなきわらハへの中にまじハつて、いまたきくことえざるさきに善悪(ぜんあく)乃事を哥につくりてひろうし侍るものなり。天に口なし、人乃さえずりをもつて事とすといへり。もつての外(ほか)のきんき乃哥どもをうたひけり。天下のみたれ日本(にほん)の大難(だいにん)出来(いで)たるべく侍り。一定(ちやう)東方(とうほう)より千嶋(ちしま)のゑびす、わがてうにせめきたつて王位(わうゐ)のそミをなすへきにや。『聖徳太子傳』卷第二・九歳21才③」

蟪蛄が斧を取つて隆車に向かふ

・義仲(よしなか)、其後胤(こうゐん)として、首(かうべ)を傾(かたぶ)けて年(とし)久(ひさ)しく、今(いま)はこの大功(たいこう)を發(おこ)す事は、たとへば嬰兒(ゑんじ)の貝(かひ)をもつて巨海(ちよかい)を量(はか)り、蟪蛄(たうらう)が斧(を)を取(と)つて隆車(りやうしや)に向(む)かふがごとし。然りといへど、君のため、国のためにこれをおこす。身のため家のためにして、是をおこさず。志の至神(ししん)に有。『舞の本』木曾願書」二〇八⑯」

・判官聞し召されて、「義経が討手に土佐なんどを上(のぼ)せらるゝ事、**蟪蛄(たうらう)**が斧(を)の取(と)つて**隆車(りうしゃ)**に向(む)かふがごとし。時刻(こく)移(うつ)して叶(かな)ふまじ。急(いそいで)連(つ)れて参(まい)れ」「承(うけたま)る」と申て、土佐が宿(やど)へ尋(もと)ゆき、「案内(あんない)申さう」。内(うち)より、「誰(た)そ」と答(こた)ふる。「舞の本『堀川夜討』三三⑭」《意訳》カマキリが前足を振り上げて、大きな車に立ち向かうようなもので、自分の微力の程をわきまえず、強敵に反抗すること。無謀で身の程をわきまえない大それたことたとえ。⇨平安時代《類》観智院本『世俗諺文』四八「蟪蛄廻車」。《典拠》『文選』

殿原兄弟は、魚と水のごとし

・さすが、名ある弓取に、いかにとして、恥を見すべきぞ。げにやらん、この者、**殿原兄弟は、魚と水のごとく**にて、兄が酒を飲む時は、弟が飲まず、弟が飲めば兄が飲まず、互ひに用心すると聞つるもの。今もや、弟の五郎が内に有らんに、悪しうかゝつて座敷をば立損じ、真向割られ、悪しかりなん」と存ずれば、人も囃さぬ舞を、立てぞ舞ふたりける。「舞の本『和田酒盛』490⑦」《意訳》肉親兄弟姉妹は、互いに密接な関係にあること。

泥の中にも蓮あり 草の中にも黄金あり

・上浄瑠璃此由聞し召し「さうな言ふそや女房達 笛をば笛とも思ふかや 楽を楽とも聞きつるか 昔より名人人をば誇らぬ物 大海塵を選ばぬ物 神は社を定めぬ物 花は所を嫌はぬ物 **泥(でい)の中にも蓮(はちす)あり 草の中にも黄金(こがね)あり**」とて 上浄瑠璃御前は一首はかうぞ聞えける。「説経集『浄瑠璃御前物語』二一⑦」《類》「泥の中のはちす草の中のはちす」『ものぐさ太郎絵巻』。「どろのうちはちす」「わらづとにこがね」「毛吹草」《意訳》意外なところに素晴らしいものが潜んでいるたとえ。

・君の長は、聞し召し「和御前(わごぜん)は、東海道の名折(なをり)を申ものかな。芸(げい)は主(ぬし)をさげず。泥(でい)の中の蓮(はちす)、知るを人倫(じんりん)といひ、知らざるを鬼畜(きちく)にくに譬(たと)へたり。いかに吉次が連れたる京藤太(きやうとうだ)と申共、吹(ふ)けばこそ笛(ふえ)をば差すらめ。調子(てうし)一つ所望(しやうぼう)せよ」。「舞の本『烏帽子折』320⑫」《意訳》汚れの世にあつても染まらず清く貴いものたとえ。

虎の尾を踏み毒蛇の口を逃れたる

・しやうしんのめに喜びて **虎の尾(を)を踏(ふ)み毒蛇(どくじゃ)の口(くち)を逃(のが)れたる**心地して 醍醐(だいご)を指してぞ急がれる 「説経集『牛王の姫』四二八⑦」《類》「虎の尾踏み毒蛇の口を逐る」『譬喩尽』《典拠》「如√踏≒虎尾」「如√踏≒毒蛇首」「大智度論」

情は上下に依るべからず

・折節(おりふし)有合(あ)ふ人々達(たち)、彼(かれ)が有様(ありさま)推(おし)量(りょう)はかり、「いかさま彼(かれ)は公達様(きんだちさま)に推参(すいさん)すいさん申さんそのために、これまで参(まい)るとうち見(み)えたり。情(なさけ)は上下(じやうじやう)に依(よ)るべからず。あの恐(おそ)をそろしき朽(くち)木の梅(うめ)さへ八重(や)に咲(さ)きぬれば、たとへ姿(すがた)は荒磯(あらいそ)の夷(えびす)に似(に)たる人なりとも、心の花の情(なさけ)をば懸(かけ)させ給(たま)へ」と言(い)ひければ、少人(せうじん)聞(き)きしめされて、何とも物をば仰(おほ)せも無(な)くて、御盃(みさき)をぞ下(くだ)されける。「仮名草子『竹齋』上107⑩」《類》「情は上下に依るべからず」幸若『大織冠』《意訳》恋は貴賤(きでん)上下の差別に邪魔(じゃま)されない。恋に上下の差別無し。

七尋の島に八尋の舟を繋ぐ

・げにまこと 昔(むかし)を伝(つた)へて聞くからに **七尋(しちじん)の島(しま)に八尋(はちじん)の舟(ふね)を繋(つな)ぐ**も これも女人(おんな)によにんの知恵(ちゑ)賢(かしこ)ひ物語(ものがたり)申(まを)さばやと待(まち)ゐたり。「説経集」をぐり

二〇九③」《類》「七いろの島に。八いろの舟をかくすとやらん。申たとへの候ぞや」『舞曲』しづか」《意訳》不可能なことを可能にする。

生兵法は大疵の基

・たとひ今まで罪作(つくりたる)人(ひと)にても、題目(だいもく)を唱(とな)へ、又は念仏(ねぶつ)を申せば、罪(つみ)も滅(めつ)して善人(ぜんにん)たり。此世(このよ)の道(みち)みちを行(な)おこなはずとも、何事(なに)も仏(ほとけ)の方便(へんぽう)にまかせ、正直(しやうじき)なるこそよけれ。生(なま)まき兵法(へいほう)は**大疵(おほきず)**の**基(もと)**とる、地獄(じごく)の**辺(あたり)**あらあぶな」と言(い)ふ。「仮名草子集『清水物語』下一七二①」《意訳》中途半端に武術を知っていると、大怪我をするものになる。《類》『毛吹草』

難波の葦は伊勢の浜荻

・されば所(ところ)も都(みやこ)に程(ほど)近く、轡(わ)ども、都(みやこ)の西(にし)と一致(いちじ)にして、又(また)都(みやこ)の分(ぶん)を勤(こ)めたる女(を)も、間(ま)には此所(このところ)に来(き)ぬれば、風俗(ふうふく)変(か)るべきにしもあらねど、げにや世(よ)の諺(ことわざ)にも、「**難波(なにわ)の葦(あし)**は**伊勢(いせ)の浜荻(はまおぎ)**」とやらん、所(ところ)変(か)れば、座配(ざはい)ことから、都(みやこ)とは軽忽(けいこ)変(か)りたるもの也(なり)。初会(はつかい)の客(きやく)に宿屋(しゆくや)の亭主(ていしゅ)が挨拶(あいさつ)するとて、「こゝもとは草深(くさふか)き所(ところ)にてござりまする」といふが如(ごと)く、何処(どこ)やら草深(くさふか)にして寂(さび)たる色(いろ)あり。「仮名草子集『都風俗鑑』四七三⑤」《意訳》物の呼び方や習慣はその場所によって異なる。《類》『菟玖波集』雜三。

人間五十年、化天の内を比べれば、夢幻のごとくなり

・**人間(にげん)五十年(ごじゅうねん)**、**化天(けてん)の内(うち)**を**比(くら)べ**れば、**夢幻(むげん)**の**ご**とくなり。一度生(いちどせい)しやうを受け、滅(めつ)めつせぬ物(もの)のあるべきか。これを菩提(ぼだい)の種(たね)と思(おも)ひ定(さだ)めざらんは、口惜(くちお)しかりき次第(しだい)ぞ」と思(おも)ひ定(さだ)め、急(いそ)ぎ都(みやこ)に上(のぼ)りつゝ、敦盛(あつもり)の御首(みくび)を見(み)れば、もの憂(うれ)さに、獄門(ごくもん)よりも盗(ぬす)み取(と)り、我(わ)が宿(やど)に帰(か)り、御僧(ごそう)を供養(くやう)し、無常(むじやう)の煙(け)けぶりとなし申(まを)す。「舞の本『敦盛』227⑥」《意訳》人間界の五十年は、化樂天、すなわち八千歳の長寿を保つ樂土に比べると、夢幻のようににはかない瞬目の一瞬のようなものである。《類》『塵荊抄』卷十一「人間六十年電光朝霞ノ如シ。」(386二)

人間は水と見れば、魚は家と見る 天人は瑠璃と御覧ずれば、

餓鬼は焰と見る 四見不同

・重忠(しげただ)承(うけたま)へて、「いかで、某(それがし)も詳(くは)しくは存候(ぞんこう)べき。それ、人間(にげん)は水(みづ)と見(み)れば、魚(うい)は家(いへ)と見(み)る。天人(てんじん)は瑠璃(るり)と御覧(ごらん)ずれば、餓鬼(がき)は焰(ほむら)と見(み)る。これ(これ)を四見(しけん)の不同(ふどう)と申(まを)なり。よく見奉(みほう)たてまつれば、千手(せんじゆ)の御頭(ごし)にておはします。忝(かたじけなく)も、五智(ごち)の宝冠(ほうくわん)よりも金色(こんじき)の光(ひかり)の立(た)たせ給(たま)ふぞや」。「舞の本『景清』265⑧」《意訳》同じ対象が、見る立場の違いによって異なつて見えること。「一水四見」「一処四見」「一境四見」と言われる唯識學のたとえ。

猫も杓子も

・一休(いっけ)聞(き)給(たま)ひて、「和御前(わごぜん)は歌(うた)ずきなれば、歌(うた)にて一々(いっさ)答(こた)へ侍(さむらい)らん。聞(き)給(たま)へ」とて、邪正(じやせい)一如(いちに)の心を、生(なま)れては死(し)ぬるなりけりをしてなべて釈迦(しやくか)も達磨(だつま)も**猫(ねこ)**も**杓子(しやくし)**も「**仮名草子集『一休ばなし』三三五③**」《意訳》この世に生を受け、やがて死んでいく、それはどんなに貴い釈迦でも、達磨でも、生き物である猫もそして杓子も。と考えるとき、最後の「杓子」だけがどうしても合点(ごてん)がいかない。この「シヤクシ」は音読みで「赤子」と見たい。さすれば、生き物である猫もいちばん稚い赤子でも……。となると私は考えている。

鼠も猫に食らいつき 犬も虎を食らふ

・時に因りて鼠も猫に食くらいつき、犬も虎を食くらふ事あり。さやうの事にて良(よ)き物とは言(い)ひ難(がた)し。「仮名草子集『清水物語』下一八〇⑪」《典拠》『窮鼠却嚙』狸のねこ『塩鉄論・詔聖』

美女は悪女の敵

・されば朝陽をかさざれども残星(ザンセイ)光をうばはるるとかや申すごとく、吉原にまた上臈(ジヤウラフ)ありとも見えざれば、美女は悪女の敵(かたき)とかや、片方(かたへ)の妬(そねみ)ふかうして、あらぬ讒難(ザンナン)を申しかけ候へども、曇りなき御身なれば、その難は月の前のうき雲の嵐にはるるごとくにて、夜(よ)にまし日にそひ、あまねくあふぎかしづけども、この君御心(みこころ)ふかきかたにて、たやすく人にみえたまはねば、この事においては、ふつと思ひ切り給へ。「仮名草子集『露殿物語』57⑫」《意訳》美しい女人は醜い女にとって仇であり、そねまれる。

《類》『美女は悪女の仇(かたき)』『毛吹草』《連関資料》『美女者悪女ノ之仇(カタキナタ左傳三云ク、女ハ無シ美一惡一入テニ室ニ一見妬ウラヤマル。士ハ無シ賢ケシ不肖ラセウ一。入テニ朝ニ一見ウラヤマル。美一女ハ者悪一女之仇ナリ。豈ニ不ラ乎』『観智院本』『世俗諺文』一〇〇」

美人は言はねど隠れなし

・人をたばかる謀、親しくならでは叶はじ」と思し召される間、見目よき女を尋、我が姫と号し、いつきかしづき給ひけり。美人は言はねど隠れなし。都の上下かつ知て、及ぶも及ばざりけるも、望をかけぬ人はなし。「舞の本『入鹿』六⑤」《訳》美人は誰がいったわけでもないのに世間に知れ渡る。

人と契らば薄く契りて、末まで遂げよ。紅葉々を見よ。薄ひが散るか。濃きぞ先づ散る物で候

・「さても今(いま)思ひ當(あた)りて候。世中の流行歌(はやりうた)に、「人と契(ちぎ)らば薄(うす)く契(ちぎ)りて、末(すえ)まで遂(とげ)よ。紅葉々(もみぢば)を見(み)よ。薄(うす)ひが散(ち)るか。濃(こ)きぞ先(ま)まづ散(ち)る物(もの)で候」とあり」と言ひければ、「さて、物知(ものし)りの言(い)ひ置(を)きし事は、有難(あり)いがたひかな」と言(い)ひて、笑(わら)ひになりにつけり。「仮名草子『竹齋』下132⑪」《類》『阿国歌舞伎草子』参照。

人の耳は壁に付き、眼は天を駆ける

・正尊(ただのり)聞て、「さればこそ、人の耳(みみ)は壁(かべ)に付(つ)き、眼(め)は天(てん)を駆(か)けるとは、今(いま)こそ思ひ知られたれ。夕べ着(き)いたる正尊(ただのり)を、誰(たれ)の者が参(まゐ)り、御所(ごしょ)にて、「かく」と申(まう)つらん。対面(たいめん)せでは叶(かな)ふまじ。こなたへ連れて参(まゐ)れ」「承(うけ)る」と申(まう)て、吉盛(よしかさ)を出居(しゅい)へ請(こ)しやうず。「舞の本『堀川夜討』353⑮」《意訳》『秘密は漏れやすく、油断できないことのたとえ。《類》『人耳者付壁 密而勿讒言』

人眼者懸天 隱而勿犯用『童子教』。

人は一代名は末代、名に付きたらん其疵は末代までもよも失せじ

・元暦(げんりき)の頃(ころ)かとよ、佐藤(さとう)庄司(さぶし)が子息兄弟出陣(しゅしん)の時(とき)、「人は一代名(いちだいな)は末代(まつだい)に、名(な)に付(つ)きたらん其疵(きず)は末代(まつだい)までもよも失(う)せじ」とい(い)さめたりし心(こころ)のうち、実(じつ)もと覺(おぼ)えて哀(かな)れなり。「仮名草子集『身の鏡』中三〇三⑩」《意訳》人間の命は一代で滅びるけれども、名声(めいせい)は死後(しご)も残り、自分が受けた恥辱(ちじよく)はいつまでも消(き)えることがない。《類》『幸若』八島』

百様を知りたりとも一様を知らず

・「なふ いかに女房達 百様を知りたりとも一様を知らずはの 知つて知らざれよ 争う事のありそとよ 知らずはそこで聴聞せよ さてこの文の訓の読みして聞かすべし」文の紐を御解きあり。「説経集」をぐり』一七五⑤「《類》「百様を知りたりとも一様を知らずは争うことなかれと申すたとへのあるぞとよ」『舞曲』鳥帽子折』《意訳》沢山のことを知つていてもなお知らない一事があれば、それが大切なことでもあるかも知れないので、強いて主張してはいけない。

煩惱は家の犬、打てど門を去らぬ

・誠まことに菩提(ぼだい)は水に澄すめる月、手に取(と)るに取(と)られず、煩惱(ぼんなう)は家の犬(いぬ)、打(う)てど門(かど)を去(さ)らぬとかや。「仮名草子『竹齋』上・大系101⑥」《類》「心に心を許すべからず。煩惱の犬は打て共門を去らず。心は、山のかせぎはなつて共従はず」「『實物集』巻中」「煩惱は家の犬、打て共門を去らず、菩提は山のかせぎ、招け共来らずと言へり」「三浦浄心『そぞろ物語』(寛永十八年刊)《意訳》煩惱の去り難い喩え。※上記、鎌倉時代篇参照。

身捨つる藪はなけれども 子捨つる藪はある

・その時 母御は「いかに金魚に申すべき 夜泣きするだにうるさいに 長泣を始むるか 昔が今に至る迄 身捨つる藪はなけれども 子捨つる藪はあると聞く」「説経集」かるかや」二八三⑦「《類》「子を捨てる藪はあれど身捨つる藪なし」《意訳》窮しはてるまま子どもは捨てることは出来ても、わが身の捨て場はない。

身の上知らずの人事云

・かまへて／＼、左様の事を、向後人の聞所にて云給ふな、「身の上知(し)らずの人事云」といふ世話に等(ひと)し。「仮名草子集『身の鏡』下三二三⑮」《意訳》自分の置かれた立場をわきまえずに他人のことを言う。《類》「身しらずの口たゞき」『北条氏直時代謄留』。

身より出せる錆

・かゝる事までも身(み)より出せる錆(さび)とは知らで、猶彼(か)の思ひ者(もの)に深(ふか)き恨(うら)みを含(ふく)み、終(つゐ)に生霊(いきりやう)となりける心の内こそ恐(おそ)ろしけれ。「仮名草子集『是樂物語』下二五三⑬」《意訳》自分の悪行の結果、自らが苦しむこと。《類》「身から出したるさび」『毛吹草』。

身をつみて人の痛さを知れ

・我に人の諫(いさ)めを云に、柔(やは)らかに詞(こと)をいへば心よく合点し、よき事にてもあらけなく人の云時は、我わろきことはさて置、腹立ものなり。「身をつみて人の痛(いた)さを知(し)れ」と世話に云伝(つた)へたる事、尤の理なり。「仮名草子集『身の鏡』下三二三⑮」《意訳》自分の苦しみから他人の苦しみをおもんばかり同情せよ。《類》「本朝俚諺」。

盲の打つ杖には咎もなし

・母は此由聞召。「さればこそとよ 某は。姉に安寿の姫。弟につし王丸とて。子をば姉弟(きやう)うだい持ちたるが。これより奥方へ売られ行き。行方がたなきと聞きてあり。さやうに 目の見えぬ者は」(口+多たら)さぬものぞ。盲(めくら)の打つ杖には咎(とが)もなし」と。辺(あたり)を払ふておはします。「説経集」さんせう太夫』三八二⑬「《類》「さのみおなぶり給ひそよ、盲目杖に咎なし、そのき給」と払いある」(せつきやうしんとく丸)《意訳》盲人が杖で打つても、戸がにはならないの意。

盲亀の浮木、優曇華

・かゝる尊き智識に逢ひ奉る事は、盲亀(まうき)の浮木(ふぼく)、優曇華(うどんげ)と存候へば、後の世

の事も尋(たづ)ね申さんために、是まで参りて候。《典拠》生(な)世(よ)為(な)る人難、値(た)は仏世(ぶつぜ)亦難、猶如(なほごと)大海中盲亀(めいこう)遇(あ)浮木(うき)孔(く)一(いつ)《涅槃經》「仏難(ぶつがた)得(え)値(た)、如(ごと)く優曇波羅華(うだんばらけ)一、又如(なほごと)く一眼之亀(いっげんのかめ)値(た)浮木(うき)孔(く)一(いつ)《法華經》妙莊嚴王本事品(めうしやうげんおうほんじしん)《類》(しんて)これはこのあたりに住む者なるが、かく有り難き御法に逢ふ時、盲亀(めいこう)の浮木(うき)、優曇華(うだんけ)の花(はな)待ち得たる心地して、《謡曲集》「実盛(みさき)《意識》(いしやく)盲亀(めいこう)の浮木(うき)は、大海(たいかい)のなかに住み、百年(ひゃくねん)に一度(いちど)だけ海上(かいじやう)に浮かび上がる盲(め)の亀(かめ)が、海上(かいじやう)に漂(た)う一本(いっぽん)の浮木(うき)の孔(く)に頭(かぶ)を差し込むといった経文記載(きざい)の寓話(うた)で、ほとんど、不可能(ふで)な偶然(ぐうぜん)な機会(きかい)をいう。また、「一眼(いっげん)の亀(かめ)ともいう。《優曇華(うだんけ)は、桑科(そうか)桑属(そうじゆく)の喬木(けうぼく)で、花(はな)が見え難いことから、三千年(さんせんねん)に一度(いちど)、金花(きんけ)が咲く時、仏(ぶつ)がこの世(よ)に出現(しゆげん)するという伝説(でんせつ)の植物(しょくぶつ)。これも稀有(きゆう)なものという。《仮名草子集(かみくさしじふ)》「竹齋(ちくさい)上(かみ)・大系(たいけい)101」

闇の夜の礫

・善悪(ぜんあく)の見及(けんいつ)(を)よびもなく、世上(じやうじやう)の沙汰(さた)にうちつるゝ事、闇(やみ)やみの夜(よ)の礫(つぶて)《ことし。心付(こころづ)くべし》。《仮名草子集(かみくさしじふ)》「身の鏡(みのかげ)中(なかつ)三〇〇⑤」《意識(いしやく)》目標(もくひやく)が定まらないあてずっぽうから、根拠(こんこ)のない悪口(あくぐち)などにたとえる。《類(るい)》「闇(やみ)に鉄砲(てつぱう)せわ焼草(やうそう)」

良薬は口に苦く 毒は味ひよし

・欲(よ)の方(かた)に心(こころ)を寄(よ)すれば欲心(よくしん)出(い)づる。さはありながら良薬(りやうやく)は口(く)に苦(にが)く毒(どく)は味(あじ)ひよし。此(この)如(ごと)く善(よ)き事(こと)は身(み)にむつかしきによつて嫌(いや)がり、悪(あく)しき事(こと)はしたし。これ人欲(にんよく)のおふ所(ところ)なり。《仮名草子集(かみくさしじふ)》「身の鏡(みのかげ)上(かみ)二七四⑦」《典拠(てんこ)》「孔子(こうし)曰(いふ)、良薬(りやうやく)苦(く)於口(く)、而利(に)於病(やま)、忠言(しゆげん)逆(さか)於耳(みみ)、而利(に)於行(ゆき)」《孔子家語(こうしけいご)》四。

老少不定の世の中

・むつかしの聖語(せいご)や、氣(き)の毒(どく)の書物(しよぶつ)や、老少不定(らうしふてい)の世(よ)の中(なかつ)明日(あした)をも知(し)らぬ命(いのち)にて、今日(けふ)の樂(たのしみ)こそめでたけれ。孔子(こうし)といふ唐人(ていじん)のいひ置(お)きをし事(こと)、何(なん)の用(もち)にかたつべき、たゞ酒飲(さけのみ)のふて、小歌(こた)こそおもしろけれ」と、口(く)にまかせて言(い)ひ散(ち)らす。《仮名草子集(かみくさしじふ)》「身の鏡(みのかげ)中(なかつ)二九〇⑤」《意識(いしやく)》人の寿命(じゆめい)というものは老人(らうじん)が早く死(し)に、若者(わかしよ)がその後(のち)に死ぬ(しぬ)とは限(かぎ)らないものだ。《類(るい)》「せわ焼草(やうそう)」

籠鳥の雲を恋ひ、壺中の魚の泡に息づく

・かやうに人はせしかども、伊藤(いとう)は心(こころ)二つなくされて、弓矢(きうし)を取りしなり。かやうに弓矢(きうし)取る者は、頼(たの)もしき弓取(きうと)り、当千(たうせん)と是(こゝろ)を名付(なづ)けたり。それに、伊藤(いとう)が子孫(こそん)しそを疎(う)とみ果(は)てさせ給(たま)ひて、命(いのち)めいを継(つ)ぐべき便(たより)もなし。籠鳥(ろうてう)の雲(くも)を恋(こ)ひ、壺中(こちゆう)の魚(うい)の、僅(わずか)かに泡(う)はに息(いき)きつゝ風情(ふうせい)に生(な)きて甲斐(かひ)なき憂(うれ)き身(み)と成(な)る。とても消(き)きゆべき露(つゆ)の身(み)を、親(おや)の敵(かたき)と討死(うちじ)にし、名(な)を後(のち)の世(よ)に挙(あ)げむため、我君(わきみ)きみ」とこそ申(まを)けれ。《舞(まい)の本(ほん)》「十番切(じふばんぎり)558②」《意識(いしやく)》拘束(こうさく)されているものが自由(じゆう)を望(のぞ)むこと。《類(るい)》「只有(ただ)籠鳥(ろうてう)恋雲(こいぐも)之思(を)」「未免(なほ)轍魚(てつぎよ)近肆(きんし)之悲(を)」《本朝文粹(ほんていぶんすい)》卷六(くわん)・平兼盛(へいけんせい)。「轍魚(てつぎよ)泥(どろ)二吻(ふ)イキヅキ」《太平記(たいへいき)》卷十六(くわん)・將軍筑紫御開事(しやうじんちくしごかいじ)。

籠鳥は雲を恋ひ、帰雁は友を忍ぶ

・シテそれ籠鳥(ろうてう)ろおちよおは雲(くも)を恋(こ)ひ、帰雁(きえん)きがんは友(とも)を忍(しの)ぶ、人間(にんげん)にんげん)もまたこれ同じ、貧家(ひんか)ひんか)には親知(しんち)少(すく)なく、賤(いや)しきには故人(こじん)疎(う)とし、老衰(らうすい)おすい)おとろへ形(かたち)もなく、露命(ろめい)窮(きわ)まつて霜葉(しもは)そおよお)に似(に)たり。《謡曲集(うたいくしじふ)》「檜垣(ひのき)二八一⑩」《類(るい)》「籠鳥(ろうてう)の雲(くも)を恋(こ)ふる思(おも)ひ、遙(はるか)かに千里(せんり)の南海(なんかい)に浮かび、帰雁(きえん)友(とも)を失(う)ふ心(こころ)、……」《平家物語(へいけものがたり)》卷十(くわん)「八島院宣(やしまいんせん)」。《意識(いしやく)》籠(かご)の鳥(とり)は天空(てんくう)の雲(くも)を恋(こ)い慕(も)い、北(きた)へ帰(かへ)る雁(かり)は馴染(なじみ)んだ友(とも)の別(わか)れを悲(かな)しむ。

驚は羽のためにころされ、虎は皮のために命をうしなふ

・しかのみならず、**驚わしは羽(はね)のためにころされ、虎は皮のために命をうしなふ。**『寶物集』卷第二(71⑫)

破鍋に綴蓋

・とかく生物の事なれば堪忍ならぬ道にて、それ／＼に心を通はし、**破鍋(われなぐ)に綴蓋(とどぶた)**が有なり。『仮名草子集』都風俗鑑』四四一⑫』《類》『毛吹草』

・彼(か)のいふせき所にて朝催もよひ気味きみよく食(た)べ待るも、余(よ)の所のむつかしき筵(むしろ)に列(つら)なりて、七五三にて持(も)て成(な)さるゝよりも、しみ／＼と身に入(い)るばかり味ひあるらんと思ひやるも、「実に雁も鳩も食(く)ふたるものこそ知め」と、彼(か)の**綴蓋(とどぶた)に破鍋(われなぐ)**の思ひに身を焦(こ)がせし。『仮名草子集』是樂物語』下二五三⑬』
《意訳》欠点があろうが、似通った者同士が結婚するのがふさわしい。

【参考文献一覧】

御伽草子『猫の草子』小学館日本古典文学全集

仮名草子集『一休ばなし』岩波新日本古典文学大系

仮名草子集『恨の介』岩波日本古典文学大系

仮名草子集『清水物語』岩波新日本古典文学大系

仮名草子集『是樂物語』岩波新日本古典文学大系

仮名草子集『竹齋』岩波日本古典文学大系

仮名草子集『田夫物語』小学館日本古典文学全集

仮名草子集『身の鏡』岩波新日本古典文学大系

仮名草子集『都風俗鑑』岩波新日本古典文学大系

仮名草子集『露殿物語』小学館日本古典文学全集

古浄瑠璃 説経集『阿弥陀の胸割』岩波日本古典文学新大系

古浄瑠璃 説経集『牛王の姫』岩波日本古典文学新大系

古浄瑠璃 説経集『かるかや』岩波日本古典文学新大系

古浄瑠璃 説経集『さんせう太夫』岩波日本古典文学新大系

古浄瑠璃 説経集『浄瑠璃御前物語』岩波日本古典文学新大系

古浄瑠璃 説経集『をぐり』岩波日本古典文学新大系

古浄瑠璃 説経集『一心二河白道』岩波日本古典文学新大系

『聖徳太子傳』寛文六(1666)年版本)

抄物・惟高妙安『玉塵抄』大空社、古辞書抄物

抄物大系『蒙求抄』勉誠社

世阿弥『申楽談儀』岩波日本思想大系24)

仏教説話集『塵荊抄』古典文庫・国立国会図書館蔵

舞の本『敦盛』入鹿『烏帽子折』景清『木曾願書』小袖曾我『十番切』堀川夜討『富樫』和田酒盛』

(岩波日本古典文学新大系)

謡曲集『善界』檜垣』岩波日本古典文学大系)

日記記録『蔗軒日録』岩波書店

E 江戸時代中期・後期の諺

蟻の思ひも天にとどく

・蟻(あり)の思(おも)ひも天(てん)にとどくとやらでの。一心(いつしん)に介抱(かいほう)すれば、また能日(いっひ)の照(てる)ることが無(なく)くツてき。《式亭三馬『浮世風呂』二編之下157③》
《詠》力の弱いものも一心になればその思いが達せられる。

あんじるより産がやすい

・あんじるより産(うむ)がやすいと、思ひの外(ほか)にすら／＼と治(なほ)ることもあるからの。
《式亭三馬『浮世風呂』二編之下157②》《詠》物事を前もっていろいろ心配するよりは、実行してみれば案外たやすい。

一樹の蔭に宿り、一河の流をくむのも、みなこれ他生の縁 ↓「他生の縁」参照。

・けち助「「平はぐち」ハテさて、おまへも何(なに)にいふてぢやいな。旅(たび)は道連(みちづれ)、世(よ)は情(なさけ)ぢや。一株(いち)いちしゆの蔭(かげ)。一(ひと)とツの唐茄子(たうなす)。ハテ、賣(う)るも買(か)ふも他生(たせい)たしやうの縁(えん)で有(ある)まいか。《式亭三馬『浮世風呂』四編卷之中・278④》

一寸先は闇

・一寸(いっすん)先(さき)は闇(やみ)だわな。是(これ)が斯(かう)と煮(に)てかためたことはねへ。
《式亭三馬『浮世風呂』二編之下157③》《詠》人生の前途は定めがたい。

一寸延れば尋延る

・一寸(いっすん)延(のび)れば尋延(ひろ)のびるとやらで、寒(さむ)さの内(うち)を凌(しの)いだら、また能(よ)からうヨ。《式亭三馬『浮世風呂』二編之下157①》《詠》ちよとの間辛抱すれば、また先にはよいこともあるう。

医は死なざる病人を治す

・那張良が秦の始皇を、得殺さざりけるは、暴君ながら天資あり。命運いまだ尽されば也。かゝる故に、鄙語(ことわざ)にいはずや、医(い)は死(し)なざる病人(びやうじん)を治(ぢ)すと。その死病に至りては、倉公・華陀も争何はせん。《開巻驚奇俠客伝》第二集卷之五・二七八下⑧
＞*『国字分類 諺語』幕末成立に所載が見られる。

冪の首も信心から

・一心(いつしん)に介抱(かいほう)すれば、また能日(いっひ)の照(てる)ことが無(なく)くツてき。兎角(とかく)神仏(かみほとけ)を信心(しんしん)しなせ。冪(い)の首(かしら)も信心(しんしん)／＼がらて。《式亭三馬『浮世風呂』二編之下157⑤》《詠》イワシの頭のようなつまらぬものでも、信心すれば尊く見える。

牛と芥子は願ひから鼻を通す

章魚といふても。烏賊といふても。釣翁には縁あり。牛(うし)と芥子(からし)は願(ねが)ひから。鼻(はな)を通(とほ)すといふ諺にもれず。はや仙人になりすました氣になり。忽地雲に乗りが來て。これを假名川の臺にもち出し。糸の末を松に結とめて。その身は紙鳶(たこ)の背にしがみつき。風のもてゆくを待折から。東風そよ／＼と吹くまゝに。不思議やその紙鳶。夢想兵衛を乗せて。空中に閃き升起。雲を霞とのす程に。はじめは短かりし糸の。飴を引延すやうに長くなりて。富士山の頂上と。さしむかふまでになりたり。『胡蝶物語』卷一・一二②]

馬の耳に風

・サア、そうした上句(あげく)が悪(わる)い病(やま)ひを病出(やみだ)して、二進(につち)も三沈(さつち)も行(い)かかねはサ。兄弟(けうだい)は他人(たにん)のはじまりとは能(よく)云(い)つたもんで、大勢(おほぜい)兄弟衆(けうだいしゆ)けうだいしもあるけれど、馬(うま)の耳(み)に風(かぜ)でさつぱり音信不通(いんしんふつう)。《式亭三馬『浮世風呂』二編之下157⑧》《詠》なんともかんと、反応(はんおう)の無いこと。

疫鬼もて、仇を報ふ

・主の横死は没怪の幸ひ、世の鄙語(ことわざ)に、「疫鬼(えやみのかみ)もて、仇(あた)を報(むく)ふ」といふよしも、是等の情由(わけ)でありけんかし。《『開卷驚奇俠客伝』第二集卷之二・一八七上⑨》*『譬喻尽』に、「疫病(やくびよう)の神で敵(かたき)取る」と類諺が見える。

女子さかしくて、牛賣損ふ

・女子(をな)さかしくて。牛(うし)賣損(うりそこな)ふといふ諺(ことわざ)を。今こそ思ひあはするなれと。苦(くる)にがり切(き)つて咳(せき)つぶやくにぞ。Ⅱ「革(くわ)と爰(えい)は(しほ)でいたく説破(ときやぶ)られて。又(また)いふよしもなかりけり。《滝沢馬琴『青砥藤綱摸稜案』卷一76ウ⑨》

●そうさ。あの子(こ)も大出来(おほふで)かしさ。女(をんな)賢(さか)しくて牛(うし)を何(なに)とやらで、女(をんな)の利口(りこう)はやくにたゝね《式亭三馬『浮世風呂』二編之下159⑦》《詠》「女(をんな)さかしくて牛(うし)売りそこなうで、女の利口(りこう)なのは、かえつてことを仕損(しそん)じる。

負た子より抱た亭主

・子(こ)を捨(すて)る藪(やぶ)はあるが、身(み)を捨(すて)る藪(やぶ)はねへとやらで、たつた一人(ひとり)の女(をんな)の子(こ)を他所(よそこ)へ呉(くれ)て、夫婦(ふうふ)兩口(りうこう)かけむかひとなつた。さすが御新造(ごしんぞう)も惜(を)しかつたらうが、負(お)つた子(こ)より抱(だ)いた亭主(ていしゆ)ていしだはさ。脊(せ)に腹(はら)はらは換(か)へられねへから、其子(そのこ)をやつてしまつて、しつけもしねへ人仕事(ひとしごと)をして主(しゆ)を看病(かんびやう)したよ。《式亭三馬『浮世風呂』二編之下157⑬》《詠》いざとなれば、子供(こども)より亭主(ていしゆ)のほうが大切(たいせつ)だ。

鉄の草鞋で尋ぬ

「ナニ搦(なま)はねへ。おれがことを古狸(ふるだ)のきだといふけれど、てん／＼は狼(おほ)かめだア。百(しやく)で買(か)つた馬(うま)か磁石(ぎしやく)の劔(けん)を見たやうに、横倒(よこた)をしに寐(ね)そべつ居(て)て、年中(ねんぢう)堅(たて)の物(もの)を横(よこ)にもしねへ。チツト仕事(しごと)を精(せい)出(だ)しなせといへば、打遣置(うちやつとけ)へ。果報(かほう)は寐(ね)て待(まち)。なアんのかのと平氣馬士左衛門(へいきまざゑもん)へいきまこぜへむ。何(なに)によを云(い)つてもしらん顔(かほ)の反兵衛(はんべゑ)さんだ。ホン／＼、あんなにいけぞんきな者(もの)なア、鉄(か)ねの草鞋(くさし)《わらぢ》で尋(たづ)ねてもあるめへ 《式亭三馬『浮世風呂』二編之下144⑥》

果報は寐て待つ

「ナニ搦(なま)はねへ。おれがことを古狸(ふるだ)のきだといふけれど、てん／＼は狼(おほ)かめだア。百(しやく)で買(か)つた馬(うま)か磁石(ぎしやく)の劔(けん)を見たやうに、横倒(よこた)をしに寐(ね)そべつ居(て)て、年中(ねんぢう)堅(たて)の物(もの)を横(よこ)にもしねへ。チツト仕事(しごと)を精(せい)出(だ)しなせといへば、打遣置(うちやつとけ)へ。果報(かほう)は寐(ね)て待(まち)。なアんのかのと平氣馬士左衛門(へいきまざゑもん)へいきまこぜへむ。何(なに)によを云(い)つてもしらん顔(かほ)の反兵衛(はんべゑ)さんだ。ホン／＼、あんなにいけぞんきな者(もの)なア、鉄(か)ねの草鞋(くさし)

(わらぢ)で尋(たづ)ねてもあるめへ 《式亭三馬『浮世風呂』二編之下144⑥》《詠》幸運は自然に
来るのを気長に待つがいい。

狐の嫁入り

・狐嫁入 720よるのとの嫁御はいつかこん／＼とまてば甘露のひでり雨哉(かな) 八十氏人
『狂歌集』徳和歌後萬載集卷十一・雑中720番、418頁《類》「狐の祝言シユウゲン」。

兄弟は他人のはじまり

・サア、そうした上句(あげく)が悪(わる)い病(やま)ひを病出(やみだ)して、二進(につち)も三沈(さつち)も行(い)かかねはサ。兄弟(けうだい)は他人(たにん)のはじまりとは能(よく)云(い)つた
もんで、大勢(おほぜい)兄弟衆(けうだいしゆ)けうだいしもあるけれど、馬(うま)の耳(みみ)に風(かぜ)でさつ
ぱり音信不通(いんしんふつう)。《式亭三馬『浮世風呂』二編之下157⑩》《詠》現在の兄弟姉妹
も、後には他人のように疎(そ)くなってしまうこと。

口も八丁、手も八丁

・わつちも虫(むし)を持居(もつて)る人間(にんげん)だから合点(がてん)がつてんしねへ。なんだ。おしやべりあ
まもすさまじい。こつちはナ。口(くち)も八丁(はつちやう)、手(て)も八丁(はつちやう)だア。山
(やま)の神(かみ)の功(こう)を經(い)たのだから、よそのおかみさん達(たち)とは勝手(かて)が
違(ちが)ふだらう。泥水(どろみづ)で腹(はら)アふくらした女(をんな)だよ。思案(しあん)もな
くぶち打擲(うちやく)しても、病犬(やめぬ)をぶち殺(ころ)したやうにやアすむめへ、と
なるとかいふと聞(き)こなナ。《式亭三馬『浮世風呂』二編之下143①》《詠》口も手も達者(たつ)だ。

豪家の門に瘦たる狗なく、農夫の廩に、肥えたる鶏あり

・現(げ)に「常言(ことわざ)にいへることあり、豪家(がうか)の門(かど)に瘦(やせ)たる狗(いぬ)
なく、農夫(のうふ)の廩(くら)に、肥(こ)えたる鶏(とり)あり。安同(あんどう)に使う、奴隸(なんり)も慾(よく)には
才(さい)闌(らん)たりけん、酒(さけ)を窃(ひそ)かに隠(かく)して、鼠(ねずみ)の穴(あな)に引(ひ)く如(ごと)く、飲食(おんじ)はずといふものなければ、主(しゅ)より
先に醉臥(すいふ)して、呼(よ)べども起(た)らず、鎖(さ)すら、忘れし門(かど)に衝(つ)く反吐(はんた)の、声(こゑ)裡(うち)悲(かな)しく聞(き)えしも、還(かへ)り
陟(のぼ)りし台所(だいしよ)、水火(すいゑ)既(すで)済(じ)の数(かず)尽(つ)て、今宵(こんしやう)撃(う)つ命(いのち)とは、知らでぞ算(そろ)を乱(みだ)したる、転寝(てんね)言(こと)と、ゐる牙
と、鼾睡(かゐり)の声(こゑ)のみ高(たか)かりけり。《『開卷驚奇俠客伝』第二集卷之一・一六五上⑥》*『国字分類
諺語』に所載(しよざい)が見(み)られる。

子供の喧嘩に親が出る

・コレサ、おまへがたはどうしたもんだへ。子供(こども)の喧嘩(けんか)に親(おや)が出
(で)ると譬(たと)えにさへ笑種(わらひぐさ)だコレサ、お舌(した)さん。おめへまあ 《式亭三馬
『浮世風呂』二編之下147⑥》

子捨てる藪はあるが、身を捨てる藪はなし

・子(こ)を捨(す)てる藪(やぶ)はあるが、身(み)を捨(す)てる藪(やぶ)はねへとやらで、たつた一人
(ひとり)の女(をんな)の子(こ)を他所(よそこ)へ呉(くれ)て、夫婦(ふうふ)兩口(らうくち)かけむかひとなつ
た。さすが御新造(ごしんぞう)も惜(おぼ)をしかつたらうが、負(おぼ)つた子(こ)より抱(だ)いた亭主(ていしゅ)で
いしだはさ。脊(せ)に腹(はら)はらは換(か)えられねへから、其子(そのこ)をやつてしまつて、しつけれ
しねへ人仕事(ひとしごと)をして主(しゅ)を看病(かんびやう)かんひやうしたよ。《式亭三馬『浮世風呂』二編之
下157⑬》《詠》困窮(こんきやう)すると最愛(さいあい)の子供(こども)でも藪(やぶ)に捨(す)てるけれども、自分の身を捨(す)てることはできない。

さきんずる時は人を制す

・昼夜(ちゆうや)妻子(しよし)の傍(そば)を離(はな)れず。觀樂(くわんらく)はらんらくに暮(くら)す氣(き)と。甲(かう)が

舍利(しやり)になるまで命を的(まと)にかけ。怨敵(おんでき)退散(たいさん)するならば、頼家公は天下の武將。さきんずる時は人を制(せい)せしと云。鎌倉から和睦を破つて。攻(せめ)来るを待ツまでは。主君(しゅくん)は押シ籠(こめ)隠居(いんきょ)。ヤモかう破れ／＼ではおんでもない事勝利(しやり)は得られぬ。《浄瑠璃集》鎌倉三代記』一九二⑭《誤》相手に先んじて事を行えば、有利であること。

死ぬる子みめよし

・此上は松永出し置き候人質(ひとしち)とじち、京都にて御成敗なさるべきの由候て、御奉行矢部(やぶ)や善七郎・福富(ふくとみ)平左衛門仰付(おほせ)られ、彼(かの)子共(こども)も永原の佐久間(さくま)与六郎所に預け置かれ候、京都へ召上(めし)のぼせられ、いまだ十二・十三のせがれ二人、何れも男子(なんし)にて、死ぬる子みめよしと申したとへのごとく、姿(すがた)・形(かたち)・心(こころ)もゆうにやさしき者共に候。《太田牛一》信長公記》卷十二228⑥《誤》早死にする子は器量がよい。典拠は『土左日記』の「死にし子顔よく」。

脊に腹は換られない

・子(こ)を捨(す)てる藪(やぶ)はあがあるが、身(み)を捨(す)てる藪(やぶ)はねへとやらで、たツた一人(ひとり)の女(をんな)の子(こ)を他所(よそこ)へ呉(くれ)て、夫婦(ふうふ)ふた口(くち)かけむかひとなつた。さすが御新造(ごしんぞう)しんぞも惜(おし)をしかつたらうが、負(お)ぶつた子(こ)より抱(いだ)いた亭主(ていしゅ)でいしはさ。脊(せ)に腹(はら)は換(か)へられぬへから、其子(そのこ)をやつてしまつて、しつてもしねへ人仕事(ひとしごと)をして主(しゅ)を看病(かんびょう)かんひやうしたよ。《式亭三馬》浮世風呂》二編之下157⑮《誤》目前の生活をたてるためには、他の大切なものを犠牲(ぎせい)にしてまでもやる。

梅檀は二葉よりしてかんばし

・梅檀(せんだん)者(もの)の二葉(ふたば)よりしてかんばしく、荒木(あらい)一人(ひとり)の云(い)為(な)シワザにて、一門(いっもん)・親類(しんるい)上下(じやうげ)の数を知らず。してうの別れ血(ち)の涙(なみだ)をながす。《太田牛一》信長公記》卷十二306⑩《典拠》『平家物語』卷一・殿下乗合。《意味》才能ある者は、幼時より他にぬきんでている。

前門に虎を防げば、後門に狼を進む

・法師(ほうし)ほふしはこの光景(こうけい)ありさまを見て嘆息(たんそく)し。いにしへの諺(ことわざ)にも。前門(ぜんもん)ぜんもん(虎)とらを防(ふ)ふきげば、後門(ごもん)ごもん(狼)おほかみを進(すす)すむといへり。この家(いへ)の族(やから)。愁(なまじ)にわれを疑(うたが)ひて。拒(こ)ばみて宿(やど)を許(ゆる)さねども。却(か)つて盗賊(たうそく)ぬすびとの入(い)りたるをしらず。《滝沢馬琴》青砥藤網摸稜案》卷二4才②

袖振合も他生の縁

○^{弥次}サア／＼是(これ)からが酒(さけ)だお長屋(ながや)の衆(しゅう)ずっとこツちへおつめなせへそして法印(はふいん)さんもしやさんも袖振合(そでふりあひ)も他生(たじやう)の縁(えん)だみんな車座(くるまざ)で一盃(いちまい)はじめやせう。〔十返舎一九〕奥羽道中膝栗毛》初編中18ウ③く⑥〕

宝は身の指合せ

・サア、どうもしかたがねへから、宝(たから)は身(み)の指合(さしあ)はせたと、残(のこ)つた道具(どうぐ)(どうぐ)諸式(しよしき)ひやうしきを賣(う)つては薬(くすり)くすり、賣(う)つては薬(くすり)くすりとした所(ところ)が、三年(さんねん)越(こ)さんねん(ごし)の長煩(ながわづら)ながわづらひだから仕覚(しがく)がねへとおもひなせへ。《式亭三馬》浮世風呂》二編之下157⑫《誤》持ち合わせの品物(しんぶつ)を売(う)つて、一時(いちじ)の急場(きやう)をしるぐ。

竹をうゆるに時なし。雨を得て十分生ふ

・竹(たけ)にへかぎらず諸木(しよぼく)も、皆(みな)西(にし)風(ふう)にうゆる事(こと)忌(い)物(もの)なり。又、諺(ことわざ)にも竹(たけ)

をうゆるに時なし。雨^(あめ)を得^(え)て十分^(ふん)生^(を)と。又竹を栽るハ五月十三日、是^(これ)を竹酔日^(ちくすいじつ)とも、竹迷^(ちくめい)日とも云て、此日竹をうゆれば、百活^(ひやくくわつ)〔百八百なからつく〕うたがひなく、即^(すなはち)さかゆる物なり。〔宮崎安貞・貝原樂軒『農業全書』巻九・諸木之類223^⑭〕

他生の縁

・かく宿^(やど)し参^(まゐ)らするも。他生^(たしやう)の縁^(えん)にて候はん。御僧^(おんそう)には。つかれ給ひつらめど。佛前^(ぶつぜん)にて。看經^(かんきやう)して給へといふ。松光^(まつき)化^(け)をあらはさじと。殊勝^(しゆしやう)げにもてなして。云^(いひ)けるハ。何事^(なにこと)も。過去^(こくわ)の約束^(ややくそく)にて候。かく一宿^(いっしゆ)の御恩^(ごおん)蒙^(かうむ)りぬるも。阿弥陀^(あみだ)佛^(ほとけ)の導^(みちび)かせ給ふ事^(こと)に候。と鼻^(はな)うごかしついへば。あるじハ庭^(には)に下^(お)りて。花^(はな)折^(を)りて。水^(みづ)にそゞぎて。位牌^(ゐはい)のまへなる土^(つち)の瓶^(かめ)にさしつ。〔石川雅望『飛騨匠物語』巻六・からね102才^⑤〕

旅は道連れ、世は情け

・けち助^{「平氣にけち」}ハテさて、おまへも何^(なに)にいふてぢやいな。旅^(たび)は道連れ^(みちづれ)、世^(よ)は情^(なさけ)ぢや。一株^(いちしゆ)の蔭^(かげ)。一^(ひと)ツの唐茄子^(たうなす)。ハテ、賣るも買^(か)ふも他生^(たしやう)の縁^(えん)で有^(ある)まいか。《式亭三馬『浮世風呂』四編巻之中・278^④》

・旅^(たび)は行伴^(みちづれ)、世^(よ)は好意^(ななさけ)と歟、外に聞たる世の常言^(ことわざ)も、思へば今の我上なりき。《『開巻驚奇俠客伝』第三集巻之五・三九九下^⑨》

地獄の沙汰も金次第

・何^(なに)がおめへ身上^(しんしやう)も構^(かま)ず遣^(つか)つたほどの。地獄^(ぢごく)の沙汰^(さた)も金^(かね)かね次第^(しだい)で、人^(ひと)ひとに持^(もち)長^(ちやう)ちやうじられるが面白^(おもしろ)さに、とう／＼大身代^(おほしんだい)を潰^(つぶ)して、百貫^(ひやくかん)のかたに笠^(かさ)一^(いっ)蓋^(いっ)のとなつただ。《式亭三馬『浮世風呂』二編之下157^⑧》《『訳』どんな難事でも金さえあればどうにでもなる。》

灯台下暗し

・「そりやアとんだ事だつけのう。おいらアかたつきし知らなんだ。しつたらとりせへに行だものを」それが燈臺^(とうだい)とうぜ^(とうぜ)元暗^(もとくら)もとくらしとやらだはな。我^(わが)が家樂^(からく)の金盃^(きんぱい)かなだれとやらで、内^(うち)じやア我儘^(わがまま)いつへされても、しかたがねへ。おべそがあんまり云^(て)ばねだるから、昨日^(きのう)きんにやう三絃^(さんげん)しやむせんを一^(いっ)挺^(てい)いつてう買^(か)つてやつたら、夫^(そ)それをも踏^(ふん)びいて、撥^(はち)をば何所^(どこ)かどう迷子^(めいこ)にして仕^(し)まつた。喧嘩^(けんか)の度^(ど)たんびに徳^(とく)とくは行^(い)かねへ。おめへん所^(ところ)の肝右衛門^(かんえもん)きも多むさんなんざア、全体^(ぜんてい)ぜんで氣前^(きぜん)きめが能^(い)こから静^(しづ)かだ。おらん所^(ところ)の氣位^(きゐ)きぐれとは雲泥万里^(うんてんばんりてん)の違^(ちが)へよ《式亭三馬『浮世風呂』二編之下143^⑨》《『訳』手近なことがかえつてわからない。》

・然^(しか)な宣^(のたま)ひそ。世の鄙語^(ひやうご)ことわざに、灯台^(とうだい)とうだい還^(かへ)つて下^(もと)暗^(くら)し、といふは是等の故にこそ。いへばさらなることながら、当寺^(たうじ)の延命地蔵尊^(えんめいちざうそん)は、わきて女人^(にょなん)に御利益多かり。《『開巻驚奇俠客伝』第三集巻之四・三九二下^⑬》

貴い寺は門から

・貴^(き)とうとい寺^(じ)てら門^(もん)もんとからといふけれど、医者^(いしや)さまばかりは見かけによらぬ

ものよ。裏店(うらだな)に居(ゐ)る貧乏医者(びんぼういしや)に功者(かうしや)なお人(ひと)があるものさ。《式亭三馬『浮世風呂』二編之下158⑥》《訳》徳のある者は、外観を見てわかる。

富をいたすものは、三かくを事とす

・みな當所の小説なり。されば世俗の常言に。富をいたすものは。三かくを事(こと)とす。彼利の為に事を缺(かく)。亦恥を被(かく)。義理を缺(かく)。これを三かくの富といへり。もし事を欠ときは。富といへども貧く。恥をかき義理を缺は。賤しきかぎりなり。『胡蝶物語』巻五・113⑬

長生すりやア恥多し

・年老(としよつて)能(い)く耳(みみ)を聞(き)かねで、ホニ／＼長生(ながいき)すりやア耻(はぢ)多(おほ)しとよくいつたものだよ、おかみさん。《式亭三馬『浮世風呂』二編之下159②》《典拠》「命長ければ恥多し」『徒然草』

泣子と地藏には勝てぬ

● 此かみさまつらぬ所、たゞをいふ詞くせあり 夫(それ)でもおめへ。泣子(なぐこ)と地藏(ぢざう)にやア、かなはねへといふから病人(びやうにん)の、いひなり三宝(さんぼう)にして上(あげ)なせへ。《式亭三馬『浮世風呂』二編卷之下156⑮》「泣く子と地頭には勝てぬ」の言い換え。

二進も三沈もいかぬ

・サア、そうした上句(あげく)が悪(わる)い病(やま)ひを病出(やみだ)して、二進(にんち)も三沈(さんちん)も(さつち)も行(い)かねはサ。兄弟(けうだい)は他人(たにん)のはじまりとは能(よく)云(い)つたもんで、大勢(おほぜい)兄弟衆(けうだいしゆ)けうだいしもあるけれど、馬(うま)の耳(みみ)に風(かぜ)でさつぱり音信不通(いんしんふつう)。《式亭三馬『浮世風呂』二編之下157⑩》《訳》少しも進むことができないさま。

咽元過ぎれば熱さ忘るゝ

・璃寛坊(りくわんぼう)「そりや、ならぬ／＼」薙升坊(ていしやうぼう)「これからが、大千世界(だいせんせかい)の聴聞(ちやうもん)をお説(とき)なされい／＼」四人(よにん)「のお師匠さま」鳴神(なるかみ)「ヲ、そふとも／＼」四人(よにん)「それや、お師匠さまのおゆるしが出たぞ／＼」鳴神(なるかみ)「シテどうじや／＼」當麻(あんなまり)「あんまり戯(たわむ)れがあまつて、つい口舌(くぜつ)になつたわいナア」薙升坊(ていしやうぼう)「咽元(おんげん)のどもとすぎればあつさ忘るゝじやナア」當麻(あんなまり)「エ、ずっと置(おか)しやんせ、おくまいと何とする、つめるぞへ、叩くぞへ、といふ拍子(はし)に、思はず殿御(とのご)のこのつむりをピツシヤリ」《歌舞伎十八番集『鳴神』大系212九》《訳》熱い物も咽喉を通してしまえば忘れること。

他の風見て吾ふりをも、好丐ともに改給はゞ教諭の捷道となりぬべし

・されば常言(じやうげん)ことはざにいふごとく、他(ひと)の風(ふう)ふり見て吾(わが)ふりをも、好丐(こうがい)よしあし(ともに)改(あらため)給はゞ教諭(きやうゆ)をし(へ)の捷道(ちかみち)となりぬべし。《式亭三馬『浮世風呂』二編之上111⑨》

百貫のかたに笠一蓋

・何(なに)がおめへ身上(しんしやう)も構(かま)ずに遣(つか)つたほどのに。地獄(ぢごく)の沙汰(さた)も金(かね)かね次第(しだい)で、人(ひと)に持(もち)長(ちやう)ちやうじられるが面白(おもしろ)さに、とう／＼大身代(おほしんだい)を潰(つぶ)して、百貫(ひやくかん)のかたに笠(かさ)一蓋(いつ)

の」となつただ。《式亭三馬『浮世風呂』二編之下157⑧》《**詛**》貸すところが多くて、得る所が少ないこと。それで、終いには無一文になる。

平二が耕し耘る瓜を、源太が坐して啖ふ

・御庇によりて親の仇を、撃も捕らるることあらば、「平二（いじ）が耕（たがや）し耘（くさぎ）る瓜（うり）を、源太（げんた）が坐（ざ）して啖（くら）ふ」といひけん、鄙語（ことわざ）に似たる果報に侍り。《『開卷驚奇俠客伝』第二集卷之五・二五八下⑥》*『国字分類 諺語』に所載が見れる。

北州の千年、蜉蝣の一時

・世（よ）の諺（ことわざ）に、「北州の千年（せんねん）、蜉蝣（ふゆう）の一時（いちじ）」と云事、能よく賢聖（けんせい）の意（い）に相（あひ）通（う）ぜり。《鈴木正三『反故集』三〇八①》《**典拠**》『阿毘達磨俱舍論』の頌（大正二九・61上〜中）。

三ツ子の魂百まで

・聞（き）こなせへ。斯（かう）いふことがあるはな。私等（わたしら）が親方（おやかた）の出入場（でいりば）の旦那（だんな）などのさ。三（み）ツ子（こ）の魂（たませ）百（ひやく）までと譬（たと）の通（とほ）り、小（ち）いさな時分（じぶん）から氣儘（きまま）八百（はっぴやく）に育（そだて）た物（もの）だから、大（おほ）きくなつても盲蛇（めくらへび）物（もの）に畏（おぢ）ずだ。何（なに）がおめへ身上（しんしやう）（も）搆（かま）ずに遣（つか）つたほどにの。《式亭三馬『浮世風呂』二編之下一五七⑥》《**詛**》幼時の性情は年をとつても持ちつづける。

盲蛇物に畏ず

・聞（き）こなせへ。斯（かう）いふことがあるはな。私等（わたしら）が親方（おやかた）の出入場（でいりば）の旦那（だんな）などのさ。三（み）ツ子（こ）の魂（たませ）百（ひやく）までと譬（たと）の通（とほ）り、小（ち）いさな時分（じぶん）から氣儘（きまま）八百（はっぴやく）に育（そだて）た物（もの）だから、大（おほ）きくなつても盲蛇（めくらへび）物（もの）に畏（おぢ）ずだ。何（なに）がおめへ身上（しんしやう）（も）搆（かま）ずに遣（つか）つたほどにの。《式亭三馬『浮世風呂』二編之下一五七⑦》《**詛**》物事を何も知らないものは、恐れということを知らない。

目は欲の許手

・田舎人はじめて京へ上り、方々見物せり。大佛の釋迦を見て、にはかに欲心發（を）こり、つれの友にいふやうは、「目は欲の許手（もとで）じや」といふ。「あの佛の御手程おれが手も大きならば、京一番の兩替屋の門（かど）に立、手に一ぱい小判をつかみ取たひ」といふた。「江戸笑話集『輕口露がはなし』二二六①」

論より証拠

・鄙語（ことわざ）に「いふ論（ろん）より証拠（せうこ）」、今さら多弁（たべん）に及ぶべからず。《『開卷驚奇俠客伝』第二集卷之四・二二二上⑭》

我家樂の金盃

・「そりやアとんだ事だつけのう。おいらアかたつきし知らなんだ。しつたらとりせへに行だものを」それが燈臺（とうだい）とうぜ（元暗）もとくらしとやらだはな。我（わが）家樂（からく）の金盃（きんぱい）かなだれ（と）やらで、内（うち）じやア我儘（わがまま）いつへされても、しかたがねへ。おそがあんまり云（て）ばねだるから、昨日（きのう）きんにやう三絃（さんげん）しやむせんを一挺（いつてう）買（か）つてやつたら、夫（そ）れをも踏（ふん）びいて、撥（はち）をば何所（どつ）かどう迷子（めいこ）にして仕（し）まつ

た。喧嘩(けんか)の度(たんび)に徳(とく)は行(い)かね。おめ(へ)所(と)この肝(かん)右(みぎ)門(かど)きも多(おほ)むさ
んなんざア、全体(ぜんてい)で(へ)氣(き)前(まへ)きめ(へ)が能(い)とから静(しづ)かだ。おら(へ)所(と)この氣(き)位(い)きぐ
れ(へ)とは雲(くも)泥(どろ)万(ま)里(り)(う)んて(へ)んば(へ)んて(へ)ん(の)違(ちが)い(へ)よ《式(し)亭(てい)三(さん)馬(ば)『浮(う)世(よ)風(ふう)呂(りょ)』二編(にへん)之下(の)下(した)143⑨》
《訳(わけ)》金(かね)は金(かね)かま(で)、釜(かま)を洗(あら)いに代(か)用(よう)するほど不(ふ)自(じ)由(ゆう)をしても、自(みづか)分の家(いへ)は氣(き)樂(がく)である。

【参考文献一覧】

『狂歌集』徳和歌後萬載集 (岩波日本古典大系)
江戸笑話集『輕口露(かろ)がはなし』(岩波日本古典大系)
歌舞伎十八番集『鳴神(なるかみ)』(岩波日本古典大系)
軍記・太田牛一『信長公記』(角川文庫)
式亭三馬『浮世風呂』(岩波日本古典大系)
十返舎一九『奥羽道中膝栗毛』(マリオ・マレガ文庫MN372版本)
浄瑠璃集『鎌倉三代記』(岩波日本古典大系)
鈴木正三『反故集』(假名法語集(岩波日本古典大系))
曲亭馬琴『開卷驚奇俠客伝』(岩波新古典大系)
曲亭馬琴『胡蝶物語』(岩波文庫)
曲亭馬琴『青砥藤綱摸稜案』(駒澤大学図書館沼沢文庫1350)
石川雅望『飛騨匠物語』(文化六(1809)年版本)
宮崎安貞・貝原樂軒『農業全書』(日本農業全集⑬、元禄十丁丑(1697)年七月穀日刊)

[BACK\(「うなひち」\)](#)

[BACK\(「うなひちの遊」\)](#)

[BACK\(「言葉の泉」\)](#)

[MAIN MENU\(「情報言語学研究室」\)](#)